

読書科学

第24卷 第2号（通巻 第92号）昭和55年7月1日発行（季刊）

社会の変化に対応する読書行為と

読書技術の考察

尾原 淳夫

読書感想文の記述が科学的読書材の

学習に及ぼす効果

鹿内 信善

読書材料と理解の関係(2)

池田 進一

認知—発話の言いよどみにかんする

内省報告の分析

田中 敏

92

日本読書学会

◇ 本 号 目 次 ◇

原 著

社会の変化に対応する読書行為と
読書技術の考察

甲南大学 尾 原 淳 夫 33

読書感想文の記述が科学的読書材の
学習に及ぼす効果

大同工業大学 鹿 内 信 善 45

読書材料と理解の関係(2)
——理解課題の分析——

筑波大学 池 田 進 一 56

認知—発話の言いよどみにかんする
内省報告の分析

筑波大学 田 中 敏 63

会 報

69

日本読書学会役員(昭和55年4月1日～昭和57年3月31日)

会長(理事長)	滑川道夫			
副会長(副理事長)	倉沢栄吉			
常任理事	井上尚美	岡本奎六	阪本敬彦	福沢周亮
	増田信一	湊吉正	村石昭三	

理 事	井上敏夫	出雲路猛	岩坪昭子	大村はま
	尾原淳夫	高木和子	田近洵一	野地潤家
	深川恒喜	室伏武	望月久貴	
監 事	平沢薰	山本晴雄		

編集委員	出雲路猛	尾原淳夫	阪本敬彦	高木和子
	田近洵一	野地潤家	福沢周亮	増田信一
	John Downing	Donald Leton		

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察*

甲南大学

尾 原 淳 夫**

I 研究のねらい

社会の変化の速度は速く、幅は広い。その中に生きる人間の読書生活も、変化してきたし、また、自らの手で読書の仕方を工夫し、開発していかねばならない。

その読書行為は、どのように変化してきたか。とともに知的生産の主流をなす読書行為は、より合理的、能率的な読書技術を求めている。その開発的な考察を試みたい。

II 研究の意図

私は、1975年（昭和50）8月の日本読書学会第19回研究大会において「日本人の読みのタイプ」と題して研究発表をした。次いで、それを下敷きにして、1976年（昭和51）8月、シンガポールにおける第6回国際読書学会で、「日本人の読書タイプ」(Reading Styles of Japanese)と題して発表した。

ところが、愚見にもかかわらず、外国の研究者には、意外と注目を浴びる結果となった。国際読書学会の *Journal of Reading*, 1977, 3月号に「走ることと考えること：日本における読書スタイル」(Running and Thinking : Reading Styles in Japan)と題して拙論が載せられた。次いで、デンマーク 読書学会の *Læsepædagogen* 1978, 2月号の巻頭頁に、しかもイラスト付きで掲載されるに至った。私も少々戸惑ったわけである。そこで私は、外国の研究者に刺激されて、その研究の波を広げようと意図したのが、この研究である。

ここで、発表した「日本人の読書スタイル」についての焦点を一応紹介しておく方が、以後の研究を理解してもらうのに役立つと考える。

読書行為は考えるということに通じる。読書を通して考え、読書によって考えるところに、読書の真価がある。読書と思考を切離しては意味がない。

そこで私は

Reading(読書)=Thinking(思考)
の図式を想定したのである。

それぞれの国民には、歴史と伝統の国民性による思考のスタイルがある。

(1) イギリス人は、歩きながら考える。

(British people think while they walk)

(2) フランス人は、考えた後で走り出す。

(French people start to run after they have thought)

(3) スペイン人は、走ってしまった後で考える。

(Spanish people think after they have run)

(4) ドイツ人は、考えた後で歩き出す。

(German people start to walk after they have thought)

といわれる。⁽¹⁾

それでは日本人はどうか。私は三つの思考スタイルを想定した。

(5) 日本人は考えた後で、なお考える。

(The Japanese think further after they have thought)

(6) 日本人は走りながら、考える。

(The Japanese think while they run)

* Reading behavior and reading skills for coping with the changes in our society.

** OHARA, Sunao (Konan University)

(7) 日本人は考えずして、走り出す。

(The Japanese start running without thinking)

現代日本人には、こうした三つの思考スタイルがあり、このスタイルが、現代日本人の読書スタイルに通じていると思う。

そして、日本の社会、生活の変化は、かつての(5)の修養主義、古典主義の読書スタイルから、大きく(6)(7)に通じる生活、職能、娯楽読書へと広がってきていている。

その実像に焦点をあてたい。

III 研究項目

1. 社会の変化、個人の変化

かつては、読書は図書対個人だけの行為であり、隔離された書斎での営みであった。今は違う。書斎の窓は開放され、社会の波が個人の読書生活に打ち寄せている。社会の変化について、個人の読書生活も影響されて変ってきた。

そのことについて、阪本一郎は読書の社会的要求と読書の個人的要求の二面から論述している。⁽²⁾ それでは、その二つ視点から、どのような変化がみられるか、その実像の二、三について考察してみよう。

(1) 社会からの要求

1) メディアの多様化、多量化

かつては、読み物といえば、図書と雑誌と新聞の三種位であった。雑誌といえば月刊誌。児童誌の全国誌は少年俱楽部程度、新聞といえば朝日、毎日、読売の三誌と地方紙に過ぎなかった。

それが、やがて、図書は文庫本(新書版)、ペーパーパック等の出版となる。雑誌は月刊誌から週刊誌の時代となる。対象が女性、若者、子ども、と分化してきた。新聞にしても、夕刊専門紙、スポーツ、芸能、企業、と次第に細分化してきた。また、こうした定期刊行物だけでなく、リーフレット、パンフレットの随時刊行物の種類はおびただしい。

それだけではない。マイクロカード、マイクロフィル

ム、最近はマイクロフィッシュも刊行されている。一方、音声メディアは、ラジオからテレビへ、VTRやカセットの発達で、録音テープが多量に生産されている。

こうして、メディアの種類や形態は、多種多様化してきた。そして、その量に至っては、相乗的に驚異の数である。

ちなみに、雑誌の年間推定発行部数をみると次のようである。⁽³⁾

表1 雑誌推定発行部数

昭和52年度現在

	月刊	週刊	計
児童	3億7,662万冊	3億9,296万冊	7億6,958万冊
大衆	2億8,824 //	3億5,647 //	6億4,471 //
その他 を含めて 総計	13億9,730 //	11億6,314 //	25億6,044 //

出版科学研究所調査

メディアの一つの雑誌だけをとってみても、天文学的数量である。その量は検討がつかない。児童雑誌の年間発行部数7億冊を仮りに積み重ねていくと、標高3,776mの富士山が2,600山できることになる。

2) 社会生活適応の要求

現代人は、まさにマス・メディアの氾濫の中に生きているといつてよい。「現代の社会に生活するためには、ひとは読まなければならない」とボンド(Bond)が言ったように、それでも読まなければならない。メディアに乗って流れる知識・情報を、読み、消化して、初めて、社会に対応し、あるいは対決して、社会適応の生活が可能となるのである。

それは、社会生活のハードの面だけではない。心にうるおいや楽しみを得るソフトの面もある。日本人は、スポーツを見て、読んで楽しむ。出勤途上のサラリーマン読書は、スポーツ新聞が最も多い。大阪のスポーツ専門新聞だけでも次の6種が刊行されている。

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察

①	スポーツニッポン	朝刊	スポーツニッポン大阪
本社			
②	日刊スポーツ	"	日刊スポーツ新聞社
③	ディリースポーツ	"	ディリースポーツ新聞 社
④	サンケイスポーツ	"	サンケイスポーツ新聞 社
⑤	報知新聞	"	報知新聞社
⑥	大阪スポーツ	夕刊	東京スポーツ新聞社

スポーツにいくら興味のある人でも、毎日毎日これだけのスポーツ紙が読めるはずがない。個人がこれだけ多種のスポーツ紙を求めているというより、新聞社という社会が、個人に読むことを求めるといってよい。

土曜、日曜日の朝刊紙のはさみ広告は、時によると15~20社の多数のこともある。これらは社会からの要求というより、読むことを強要されているといった感さえする。

ともあれ、社会適応のため、何を、どう読むかは、身につまされる現実の社会である。

3) 職能生活の適応

かつては、読書を必要とした職能者は、学者か教員位のものであった。今はすべての職域にわたって読書が求められている。読書実態調査をみても、最も多く読む階層は、学生に次いで、30歳までのサラリーマンと官公庁、企業の幹部職員である。刻々と移る知識情報を適確に読まなければ、時代に遅れて、職場でとり残されるのである。

そういうえば、朝の出勤時に満員電車にもまれて懸命に読んでいる新聞は「日本経済新聞」である。昨日の、今日の経済動向を会社出勤までつかもうと必死の姿である。

新聞だけではない。雑誌に至っては、各職域の専門紙が1,000種を越えている。⁽³⁾ その多くは職場を生きるために読まれているのである。

表2 月刊誌発行点数

昭和52年度現在

部 門	点 数	部 門	点 数
児童	87	時局	40
婦人	22	哲学	26
大衆	178	学参	30
総合	66	語学	35
文芸	65	教育	103
芸能	23	地歴	16
美術	27	法律	25
音楽	42	科学	32
生活	86	工学	201
趣味	132	医学	88
スポーツ	55	農水	27
経済	152		
社会	24	合計	1,582

出版科学研究所調査

(2) 個人の要求

1) 生活日程の過密化

社会の変化とともに、個人生活も変ってきた。その一つは多忙になってきたことである。中でも成人、職業人は顕著である。それは、時間的、物理的な面に止まらず、心理的多忙に追いやっている。その中に寸暇をさいで読書しなければならないし、一方、読書を遠ざける環境ともなっている。そうなると、生活の全日程にさかのぼって調整しなければ、読書の時間を生み出せなくなる。

NHK放送世論調査の「日本人の生活時間」によると、8時間寝て、8時間働いて、8時間遊ぶ、3分法は昔も今も変わらないようである。⁽⁴⁾ 問題はその中味である。その中で余暇行動の部分の使用時間を抽出してみると次のようである。(表3を参照)

このように過密化した生活時間帯の中で、所詮32分~35分のわずかの読書時間をどうふやすか、どう充実するかにかかるてくる。

表3 日本人の一日の生活時間（抄）
昭和50年度平均

項目	内 容	平 日	土 曜	日 曜
余暇行動	休 養	40分	44分	41分
	交 際	36	46	1:06
	レ ジャ ー 活 動	35	49	1:34
	テ レ ビ	3:19	3:44	4:11
	ラ ジ オ	35	35	31
	新聞・雑誌・本	32	35	34

NHK放送世論調査所

2) 読視聴機能の変化

かつてかの知的行為は、読むだけ、見るだけ、聴くだけの、それぞれが単一、単調の行為であった。新聞の連載小説にしても、さし絵が一つあって、読む補助に過ぎなかった。

メディアの発達は様相を一変した。表現を複合して、読む、見る、聴くを同時行為に変えてきた。そして、受け手も、この複合メディア（multimedia）との交互作用によって、新しい享受機能を成長させてきた。「ながら族」の発生も、その一例である。明治、大正の人には想像のつかない、現代人は複合機能の人格（personality）を具備してきたし、必要としてきたといえる。それはまた、読書行為の態様を変えてきた。

3) 精神的糧（かて）の希求

人間の生活が多忙であればあるだけ、やすらぎやゆとりを求める。社会が物質化、近代化、豊かになればなるだけ、精神的のもの、心温まるものをねがってくる。忙中閑は、自己充実の本能かも知れぬ。

あるブックガイドは、「古都の心を訪ねて」とか「心で見る」の紹介文を綴ってる。何といっても、読書は心の伴侶であり、精神的充実の糧である。世の中が如何に変ろうとも、読書を求める個人的要求は不変のものがあるはずである。

2. 読書行為の変化

上述で概観したように、読書にかかる社会背景と個人生活の変化の中で、もろもろの諸要因がからみ合って、読書行為は大きく変化してきた。それを、次の三点に焦って考察してみよう。

(1) 「読む読書」とともに「見る読書」へ

読むという行為は、元来は、文字、文章、そして一冊の本を読むことに限定されていた。その基本は、文字という人間のつくった記号を意味化する、抽象の知的行為である。その対象は文字であり、文字がすべてであった。

ところが、文字は抽象の記号であるだけに、読み解くためには、高度の読書能力を必要とするし、読むことに抵抗を伴う。そこで、理解を助けるために、絵、写真、あるいは図表を添加するようになった。読者は「読んで見る」「読みながら見る」の複合行為によって、理解を速めるようになってきた。しかも、読みの抵抗を排除することを可能にした。社会の複雑化、多忙化とメディアの発達は、この傾向に拍車をかけたといってよい。成人のための絵本化時代の到来である。1960年代にかけて、いっそう顕著になってきた。丁度「少年サンデー」（講談社）、「少年マガジン」（小学館）等の週刊誌の発刊時と時を一にする。

この時代から、絵は文字、文章の補助ではなくなった。マンガ、劇画の絵があって、ほんの数語の文字があるだけである。テレビや映画を一冊の印刷化、図書化したといってよい。そこには、「文字を読む」のではなく「絵を見る」「絵を読む」、新しい読書行為が生まれている。そして、それによって育った少年、少女は、今や30歳台の成人である。そして彼等は、文字と絵を区別して「読んで、見る」「見て、読む」のではなく、「読む見る」の同時性の機能を身につけている。

だからといって、現代人は「文字を読む」ことを不要としているのではない。いや、文字ばなれの風潮の中で、従来にまして、「読む読書」は必要とされるし、「読む読書」階層の厚味も見逃してはいけない。しかし、「読む読書」だけが、読書行為のすべてではなくなった。「見る読書」「読む見る読書」へ読書行為は幅を広げ

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察

たし、その読書機能と読書技術を必要とする現代人である。

(2) 「静の読書」とともに「動の読書」へ

読書は本来、孤独な営みである。独り静かに、先哲の書をひもどき、読書三昧にふける姿こそ最高の読書行為とされた。そこには、書を通して先人と邂逅（めぐりあい）し、自己をみつめる静かなる内省のひとときがある。雑音も雑踏もあっては邪魔である。

しかし、現代の読書は、こうした修養的読書だけではない。仕事の上で、生活のために、あるいは趣味や娯楽を求めて、とその目的は多様である。しかも一冊の大書とは限らない。刻々と情報を伝える新聞、雑誌、あるいは一枚のパンフレットに至るまで、雑多なメディアが読む対象である。読み物そのものが静止しているのではなく、動いている。動くものを追っかけていく読書といってよい。

かつては、風雪に耐えた古典が読むに価いた。それは古きによさがあった。その価値は今も変わらないが、現代はそれだけでは足らない。より新しい知識・情報を求め、それを読まなければならぬ。手に入れば、会社の仕事の中で早刻読まざるを得ない。明窓淨机で静かに思索に耽けって読むといった悠長なことは許されない。衆人がいようが、雑音があろうが、われ関せずで読まなければならない。

会社の事務の中で、顧客と面談しながら、時には廊下を歩きながら、果ては自動車や電車の中で走りながら読まねばならない。日本経済新聞が、「出社前30分——これがあなたを決定します」のキャッチフレーズをあげて

いるが、先に読書時間が制限される。その与えられた時間内で、24頁の日本経済新聞を出社までにどう読むかである。まさしく、通勤電車で走りながら読むのである。

(3) 「書斎での読書」とともに「街での読書」へ

そうなると、書斎で閉じこもっての読書だけでは間に合わなくなってきた。ましてや、趣味、娯楽の読書に至っては尚更である。読書は書斎や書斎人の占有物から、広く街頭に進出したといってよい。

その事例として、喫茶店内の実態を調査してみた。現代人は、飲食のために喫茶店に入るが、入口でまず新聞や雑誌を手にして席につく。コーヒー1杯の終了というより、新聞や雑誌の通読の終了で、店を出て行く人も相当ある。

その調査結果が次の表4である。兵庫、大阪の50店を調査した。新聞は全店所蔵していて、その種類は13種である。雑誌は週刊、月刊を含めて52種の多きに達している。中でも「少年マガジン」は、50%の店が置いている。読み物の皆無の店は4店で、92%の店は街の軽読書室となっている。そして入店者で、読んでいる客は約40%もいる。喫茶店も、今や軽書斎化の現象にあるといってよい。

これは何も喫茶店だけではない。駅という駅頭の売店には新聞、雑誌、書籍が陳列してある。街の雑貨店、食料品店は、林檎、パン、たばこの傍に雑誌を売っている。書店や図書館だけが読み物の提供源の時代は、既に過ぎた。それだけに、読書の場も書斎から街へと広がりを見せた。これも今更驚くこともない。かつて二宮金次郎は、山道で歩きながら読んだのである。

表4 「喫茶店と読み物」の調査

(1) 調査のねらい 街の喫茶店にどのような読み物がおかれ、入店者はどの程度読んでいるか。

- ① 喫茶店への読書の進出
- ② 入店者の読書への接近

(2) 調査期間 昭和53年8月～9月

(3) 調査店数 50店

(4) 調査者 K大学及びO女子大学の司書課程受講生

○数値は店数

パーセントで換算する場合は数値を2倍すればよい。

3. 読み物（メディア）の変化

読者の読書生活、読書態度の変容に対応して、読み物自体に大きな変化がみられる。読み物の編集、構成、表現、記述にわたって、かつての面影は一新したといってよい。中でも、日刊、週刊、旬刊、月刊の逐次刊行物にいたっては、その変化は著しい。

ここに日刊新聞の朝日新聞と毎日新聞の記事内容の構成の調査(表5)を事例としてとりあげ、分析してみた。

(1) ニュースから解説記事へ

新聞とはニュース・ペーパー (news-paper) である。

より新鮮なニュースを、より速く、より正確に報道するところに、新聞の発生があり、使命があった。朝夕刊で

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察

間に合わない時は、その中間に号外まで出して、その要望に応えたものである。

それが、ラジオ、テレビ等のメディアの発達は、新聞のもつ第一の使命の速報性については、その地位を他にゆずらねばならなくなつた。新聞の受けもつニュースはニュース記事というより、ニュース＋補説＋解説の記事となってきた。

この調査によると、そのニュース的記事は、朝日で82段、全記事の23%，毎日で77段、21%に過ぎない。

(2) 社説の後退

新聞の歴史をみると、もう一つの生命はその新聞社の社説にあった。かつては、社説に社運をかけて論陣は張った時代もあった。権威ある新聞は社説によって時の政府を動かしたのである。

それが今は、どの社も社説を片隅の記事に追いやつた。それだけ、読者の関心を稀薄にしたのか。それとも一新聞の影響は弱くなつて、マス・メディアの総力によらねばならぬ時代に変ってきたのか。

かつては、第1頁に掲げられていた社説が、今は朝日、毎日両紙とも第5頁に、読売は第7頁に、サンケイは主張と称して、第4頁に後退している現状である。

(3) 教養記事の増大

新聞がニュー性を他のメディアにゆずらざるを得なくなった結果として、その活路を教養記事の増大に見出したといつてよい。ニュースの解説を含めて、ニュース・ペーパーというより、読み物としての第二の誕生とみるべきである。

しかも、読者の求める教養は広範囲である。スポーツ、レクリエーション、教育、読書、文芸、健康、すまい等々、各層万般にわたつての興味、関心に応えようとしている。

この調査によると、教養記事の占める率は、朝日で92段、25%，毎日で95段、27%，とそれぞれニュース的記事より2～6%多いことになる。

(4) 連載物の増加

かつての新聞の連載物といえば、朝夕刊各一本の小説

であった。これは今も続いているが、ニュース性を主とした新聞時代は、新聞小説として一つのジャンルを形成し、社会の話題として読者を引きつけたものである。もう一つをしいてあげれば、朝日の「天声人語」、毎日の「余録」位のものであった。

それが、新聞が読物化することによって、日々の連載記事がぐっとふえたのである。社会で関心の高い分野をとりあげて、追究していくとしている。例えば、教育面では、朝日が「いま学校で」、毎日が「教育を追う」等は延々と続いている。現在、連載物は、朝日が5（マンガを除く）、毎日は13の多きに達している。

(5) 広告について

新聞広告の占めるパーセントは大きい。この調査によると、朝日、毎日とも全頁の52%，と半分以上が広告である。読者は新聞記事というより半分は広告を読まされているということになる。

宅配という日本の新聞の財政からも、一方、情報化時代の企業武器として新聞が役立っていることからみれば、やむを得ないことである。ただ注目すべきは、本の広告が意外と多いことである。朝日が31社・160点、毎日が34社・78点を紹介している。新聞を読む読書人を有効にとらえようとする意欲がうかがえる。そういう意味では、新聞は読書界にひと役かっているとみてよい。

(6) 記事の変化と読書

「いつ」「どこで」「何があった」の事件速報だけでは、新聞の存在価値は希薄になった。【それは他のラジオ、テレビ等のメディアにゆずらざるを得ない。ある事件、現象、事象に考察や論評を与えた解説記事を読者は求めている。そして、記事提供源である新聞社に、読者は信頼と権威を期待している。それだけに、その記事の正確と適正が求められる。

今日の新聞は、生活、教養、文化、ひいては思想をリードする役割を保持している。しかも、それは広範囲にわたる読み物となってきた。各層各階の人が新聞の読者である。それに応えるために記事内容は多様である。したがって、読者は記事全部を読了する興味もなければ、

その必要もない。求める記事を、必要とする記事を、どう選択し、どう摘読し、ときには、どう味読するかの、

表5 「日刊新聞の内容構成」の調査

- (1) 調査のねらい 日常の読書生活の中にある、日刊新聞の内容はどのように構成されているか。それによって、読書生活の興味を探る。
 (新聞記事と読書興味)
- (2) 調査対象紙 朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、サンケイの大坂版
 昭和53年9月4日(月)～9月10日(日)の朝刊
 (ただし、資料は9月4日、朝日、毎日の2紙のみ掲載)

頁	朝　日　新　聞	毎　日　新　聞		
1	〔政治社会〕白抜一「対北朝鮮姿勢」 〔コラム〕「天声人語」「きょうの天気」 〔広 告〕3段、本一6社15点	A11 B 1 C 3	〔政治社会〕白抜一「カナダで水上機墜落」 〔コラム〕「余録」人物評「ひと」 〔広 告〕3段、本一6社14点	A11 B 1 C 3
2	〔政治社会情報〕「大陸ダナ開発」他 〔広 告〕5段、本一2社7点	A10 C 5	〔政治情報〕連載「新聞を読んで」 「中東への旅」他 〔広 告〕5段、本一1社11点	A10 C 5
3	〔社会情報〕「サラ金法規制」他 人物評「ひと」 〔広 告〕5段、本一1社8点	A10 A10 C 5	〔社会情報〕連載「教育を追う」 「シリーズ宗教」 〔広 告〕5段、本1社29点	A 5 B 5 C 5
4	〔経済情報〕「商工経営」他 〔広 告〕8段、案内、本一7社34点	A 7 C 8	〔海外情報〕「中東3国首脳会談」他 〔広 告〕5段	A10 C 5
5	〔社 説〕「中東歴訪の首相」 「国民年金」 〔投 書〕8人〔一こま漫画〕横山泰三 〔広 告〕5段、本一1社11点	A 3 B 7 C 5	〔社 説〕「日米農作物交渉」「水不足」 〔読者の広場〕5人〔1こま漫画〕小林治雄 〔広 告〕5段、案内、本一1社1点	A 3 B 7 C 5
6	〔海外情報〕「マンガで見るベトナム」他 〔広 告〕7段、本一8社46点	A 4 B 4 C 7	塾(%)薬品(%) 〔広 告〕全面、 本(%)—1社1点	C15
7	〔海外情報〕「中東3国首脳会談」他 〔広 告〕5段、本一2社2点	A 5 B 5 C 5	〔生活教養〕連載「記者の目」—耐震 マンション、「復眼時評」他 〔広 告〕5段、銀行2	B10 C 5
8	〔広 告〕全面、セキスイハウス	C15	〔書 評〕 8段、7種 〔広 告〕 7段、本一13社13点(課題図書)	B 8 C 7

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察

	〔生活教養〕連載「流通機構」		〔書評〕8段, 10種	
9	「買い物考」他	B 8		B 8
	〔広告〕7段, 案内・本一4社37点	C 7	〔広告〕7段, 1社9点	C 7
10	全面 塾 5段 〔広告〕 自動車 10段	C15	ペン習字 5段 〔広告〕全面 自動車 10段	C15
11	〔教養〕教育「落ちこぼれ」「住まい考」 連載小説・司馬遼太郎「胡蝶の夢」 〔広告〕5段, シマヤ	B10 C 5	〔教養〕連載「新サラリーマン」「私の信条」 〔広告〕8段, 住宅	B 7 C 8
12	〔座談会〕緑化「自然との共存」 「現地ルポ」 〔広告〕7段, ローン・案内	B 8 C 7	〔広告〕全面, セキスイハウス	C15
13	〔座談会〕上と同じ 〔広告〕7段	B 8 C 7	〔教養〕連載「主婦と女」「女の気持ち」 連載小説・井上靖「流沙」 〔広告〕4段, 経企庁一物価	B11 C 4
14	〔広告〕全面, 案内・専商	C15	〔広告〕全面, 案内・専商	C15
15	〔俳壇・歌壇〕 〔広告〕7段, 自動車	B 8 C 7	〔広告〕全面, 学校・教室案内	C15
16	〔広告〕全面, 案内	C15	「スポーツ」 11段 〔囲碁・将棋〕 4段	A 3 B12
17	〔広告〕全面, 案内	C15	〔スポーツ〕 12段 〔広告〕3段, 薬品	A 2 B10 C 3
18	〔スポーツ〕 10段 〔広告〕5段, ジュース・案内	A 2 B 8 C 5	〔広告〕全面, 住宅・案内	C15
19	〔スポーツ〕 12段 〔囲碁・将棋〕 3段	A 3 B12	〔広告〕全面, 案内	C15
20	〔広告〕全面, 案内・住宅	C15	〔地方版〕「おおさか広場」他 〔広告〕6段, 学校・公益社	A 5 B 4 C 6

21	〔地方版〕「岸和田祭」	A 5	〔地方版〕連載「八木亜夫インタビュー」	A 3		
	連載「母校百年」他	B 4	「タウントピックス」他	B 5		
	〔広告〕6段、住宅・ゴルフ・塾	C 6	〔広告〕7段、毎日論文募集・商事	C 7		
22	〔地方版〕社会記事	A 6	〔社会記事〕白抜一「53日ぶり雨」	A 8		
	連載「いま学校で」	B 3	「きょうの天気」			
	〔広告〕6段、塾・経企庁一物価	C 6	〔広告〕7段、自動車	C 7		
23	〔社会記事〕白抜一「カナダ水上機事故」	A 10	〔社会記事〕白抜一「カナダの墜落」	A 11		
	〔広告〕5段、百貨店・銀行	C 5	連載マンガ・東海林さだお「アサッテ君」	B 1		
			〔広告〕3段、住宅・薬品	C 3		
24	〔テレビ・ラジオ〕12段	A 6	〔テレビ・ラジオ〕12段	A 6		
		B 6		B 6		
	〔広告〕3段	C 3	〔広告〕3段	C 3		
総括	A ニュース	82段	23%	A ニュース	77段	21%
	B 教養	92	25	B 教養	95	27
	C 広告	186	52	C 広告	188	52
	計	360	100	計	360	100
	連載—5 (マンガを除く)			連載—13		
	本の広告—31社	160点		本の広告—34社	78点	

4. 読書技術の開発

読書に技術が果してあるか、といった反論があるかも知れぬ。読書とは、心で読むものであり、体で読む行為である。それは技術ではなく経験であるという論拠からである。ことに、日本の修養主義、古典主義の伝統の読書観には、その色合いがいっそう濃いであろう。

しかし、読書の世界は大きく変ってきた。上記の読書と共に、調べる、探す、楽しむ読書が大きな分野を占めるに至った、今日の情報化時代である。

阪本一郎は、昭和34年に「読書の祕訣」(学芸図書)を刊行している。⁽⁵⁾ その中で「読書の基本わざ」と題して、すもうの「四十八手」に例をとって、①読書の深め②読書の速さ③読書の目的の三つを基準をもとに、基本わざをると説いている。これはまさに読書技術の開発の試みである。

また、最近では、「実業の日本」(1920号)は、「サラリ

ーマンの読書術」の特別企画を特集している。⁽⁶⁾ その中に例えば、外山滋比古は「本を読む技術」を磨く知恵」と題して論考している。

読書というより、知識・情報の収集、処理といった方がぴったりする。新しい時代の、新しい読書技術の開発が求められているといってよい。

(1) 「初めから読む」と「終りから読む」

本は初めから読んだものである。今でも小説は初めから終りへと読んでいかないと意味をなさない。しかし、本は必ず初めから読むとは限っていない。必要なところから読む本もあれば、終りから読んだ方がよくわかる本もある。袴(かみしも)を着てしかつめらしい初めの「序文」より、裸で綴った「あとがき」や「編集後記」を先に読んだ方が、気軽につっ込んだ著者の意図をうかがい得て、内容の大綱を解することもある。

社会の変化に対応する読書行為と読書技術の考察

ましてや、数冊、あるいは数十冊の読み物になると尚更のことである。

私の書斎に読書研究に関連する雑誌だけでも次のものが、追っかけ追っかけ届けられてくる。

「学校図書館」月刊 全国学校図書館協議会

「学校図書館・速報版」旬刊 "

「図書館雑誌」月刊 日本図書館協会

「現代の図書館」季刊 "

「図書館界」季刊 日本図書館研究会

「図書館学会年報」季刊 日本図書館学会

「日本読書新聞」週刊 日本出版協会

「図書新聞」週刊 図書新聞

「週刊読書人」週刊 読書人

「出版ニュース」旬刊 出版ニュース社

「図書」月刊 岩波書店

「内外教育」週2刊 時事通信社

「読書科学」季刊 日本読書学会 等

と定期刊行物だけでも限がない。国内ものもあれば外国ものもある。しかも、私の読書対象はこの雑誌だけではない。一枚のパンフレットから部厚い書籍もある。いや、こちらの方が主かも知れない。

そうなると、初めから終りまで通して読むことは、どう考えても不可能である。ましてや、数日出張や多忙とくると、見る見る読み物の山と化してしまう。そうなると、やむなく旧刊はさておいて、最近号から、さかのぼって読むことにしている。

これはまさしく、終りから読み始める私の読書技術である。これも読むことを職としている私の特例かも知れないが、考えれば、多くの読物と多忙の中にある現代人は、大なり小なり、こうした読書技術の開発を迫られているといってよい。

(2) 「逐条読み」と「段階読み」

情報提供の必需である新聞を、現代人はどう読んでいるか。いや、どう読まねばならないか。24頁にわたる朝

刊紙を、第1頁から24頁まで、小説を読むように丹念に「逐条読み」する人は、余程の閑人である。現代人は、そうした「逐条読み」の時間の余裕はない。もっとスピーディに、能率的な要点把握の読み方の工夫が強く求められる。それが、次に述べる「段階読み」である。読物の記述を構造的にとらえる「構造読み」あるいは「立体読み」といってもよい。

1) 何を読む

新聞があるから読むのではない。「あれが知りたい。あれが読みたい」。から読むのである。各新聞には、それぞれのカラーがある。経済に強い新聞、教育に熱心な新聞、事件を読物的にとりあげる新聞、あるいは連載物に特徴もっている新聞、と読者の興味や個性に応じて、各新聞は編集を工夫している。どの新聞を選択する段階から新聞の読み方は始まっている。

2) 頁を読む

新聞を手にすると、24頁を順次めくっていかなくてよい。政治、社会は1.2頁に、事件記事いわゆる三面記事は23頁に、スポーツ記事は、朝日は18.9頁、毎日は16.7頁に、と各新聞はジャンルごとに定頁を決めている。読みたい頁の数頁をまず通覧して、ここという記事を射止めておき、もう一度フィードバークして、そこを順次精読していくばよい。「あれは何頁にあったか」と頁を読むことである。

3) 見出しを読む

その読む過程で、まず見出しを読むことである。大きい事件だと横組見出しもある。活字の号数で事件の大小を計ることもできる。縦書見出しで5段抜きとか4段抜きとかいわれる。編集者側からすれば、見出しのことばとともに、何段抜きにするかは頭をつかうところである。読者は、まず見出しを読んで、その記事に更に入るかどうかを決めることがある。

4) 前文(リード)を読む

見出しをややくわしく補説し、事件の本文を要約した記述の前文がある。見出し5段抜きは5段抜きの数行で要約してくれている。事件の大綱はこの前文を読

むことで把握できる。誰が、何月何日、何をした位の大要はつかめる。必要度と読む時間制限によっては、この前文程度で読み終える記事も相当あってよい。広く浅く情報収取の読みのコツである。

5) 本文を読む

ここで全容をくわしく記述している。誰かについても、登場人物の年齢、職業、住所まで明らかにしている。学芸記事や連載物は、見出しと本文で前文抜きが多い。記事によっては、関係者や専門家のコメントを載せたり、時には記者の解説を附記して、事件批判の手助けをしている場合もある。ともあれ、本文は事実を事実として正確に、読者に報道するところに、その真価が問われる。

こうして、現代人の読書、特に知識・情報を得るための読書は、必要な事項を、必要なだけ、しかも、能率的

に読みとる読書技術が求められてきた。それは「摘読」といってもよいし、「斜め読み」といってもよい読書技術である。しかも、文章の「斜め読み」の域を出て、二十数頁の新聞一紙、百数頁の雑誌一冊、数百頁の図書一冊の、「斜め読み」の読書技術を開発しなければならない時代である。

引用文献

- ① 笠信太郎, 1957, ものの見方について, 角川書店
- ② 阪本一郎, 1950, 読書指導—原理と方法一, 牧書店
- ③ 出版指標年報, 1978, 出版科学研究所
- ④ NHK放送世論調査 図説日本人の生活時間, 1975
1976, 日本放送協会
- ⑤ 阪本一郎, 1959, 読書の祕訣, 学芸図書
- ⑥ 実業の日本, 1978.8, 実業之日本社

読書感想文の記述が科学的読書材の 学習に及ぼす効果*

大同工業大学

鹿 内 信 善**

問 題

実際の教室場面において読書材を与えた場合、その読書材に関するレポートを要求することが多い。レポートの形式としては幾つか考えられる。読書材の内容を要約させたり、感想文を書かせたりすることは、この典型的なものである。学習者に対するこれらの要求は、様々な目的のためになされる。たとえば、単に作文の練習としてなされたり、あるいはまた、読書活動の評価資料を得るためになされたりする。また感想文については、それを書くことにより、読み手の人間的成长を促すという立場（増田、1977）もある。しかしながら、科学的読書材に限定した場合、読書材に関する学習促進という視点から、これらの活動を行なわせることの効果を整理することも可能である。次に、この問題について考える。

Frase(1975)は、散文処理についてのモデルを提起している。そのなかで、散文教材情報を長期記憶化する処理のひとつとして、教材を構成する諸文と一緒にまとめるといった統合処理をあげている。さらに、Fraseによれば、閲読中に符号化している情報を既有知識と関係づけることにより、長期記憶はより堅固なものとなる。散文教材に含まれる情報と先行経験情報とを関係づけることは散文教材の学習を促進するという指摘は、Marks他(1974), Wittrock他(1975), Doctorow他(1978)によってなされている。

要約及び感想文記述活動については、次のように考え

* The effects of writing book reports on the comprehension of scientific reading materials.

** SHIKANAI, Nobuyoshi (Daido Institute of Technology)

られる。要約活動の基本的特徴は、読書材を構成する諸文を統合することである。また、とくに科学的読書材にあっては、感想は、読書材中の情報と自己の既有知識あるいは先行経験情報を比較することにより生ずる。従って、要約記述活動も感想文記述活動も、読書材中の情報を長期記憶化するために有効であると考えられる。換言すれば、いずれの活動も当該読書材の学習を促進する。しかし、要約に比して、感想文においては、読書材中の情報と自己の既有知識との関係づけが顕著である。このため、感想文記述を要求するほうが要約を要求するよりも、学習を促進すると考えられる。

これまでに、散文教材の学習を促進する要因を整理する試みが幾つか報告されている（鹿内、1978, 1979a, 1979b, 1980）。これらの研究では、一冊の教材を構成する一部分をとりだし、散文教材として用いている。また、実験室事態あるいは実験室の事態で検討がなされている。実際の教授=学習事態に適用可能な知見を得るために、このような基礎的研究の蓄積とともに、実際の教室場面を用いた検討も必要とされる。そこで本研究では、大学生を対象として、実際の教室場面を用い、散文教材の学習を促進する要因について検討する。読書材（散文教材）表示のための導入情報としての講義を行ない、表示した読書材を家庭で読ませるという教授=学習事態を用いる。また、読書材は一本を単位とする。

実 験 I

目的

上述の考察より、次の仮説が導びかれる。科学的内容の読書材を閲読させた場合、感想文を記述させる条件

は、要約させる条件より高い学習パフォーマンスを示すであろう。この仮説の検証が主目的である。さらに、感想文・要約記述活動と読書材に対する満足度との関係についても探索的に検討する。

方法

被験者及び実験条件

筆者の「職業指導」の講義を受講している大同工業大学学生2クラス(総て男子)。条件は、読書材内容を要約する要約条件と、読書材内容に関する感想文を書く感想文条件の2つ。各条件に1クラスずつ割りあてる。総てのデータがそろい、結果の分析に用いた被験者は、各条件とも14名、計28名である。

手 続

まず、読書材呈示のための導入情報として「職業指導序論—経営における人間観」と題する約70分の講義を行なう。ここでは、Mc Gregor の整理による「X理論—伝統的人間怠惰論」「Y理論—McGregor による対X理論反対仮説」及び各理論に基づく労働者の管理様式を呈示する(以上は広井甫「産業心理学」誠信書房、1977を参考にした)。ついで、X理論・Y理論と対応させ、社会的労働力配分機構としての現実社会と人間尊重の理念とのギャップを示し、現代進路指導が抱える問題点についての説明をする(以上は広井甫他「学校進路指導」誠信書房、1978を参考にした)。以上を骨子とした講義を、口頭・板書で行なった後、次のような教示により読書材を呈示する。進路指導に関する問題をこれから考えていいくにあたり、いかなる人間観をもつかが重要である。……考えていく手掛りとなる本として「知的好奇心(波多野誼余夫他、中公新書)」がよい。補助教材として各自購入するように。この読書材呈示に伴ない、要約条件には要約を、感想文条件には感想文を、4週間後にレポートとして提出するように教示した。いずれの条件も、大学所定のレポート用紙(A4版)2枚程度とした(原稿用紙により字数も統制することがのぞましい。しかし、実験事態にあることを気付かせないため、大学所定の成績物提出様式で行なわせた)。

「知的好奇心」では、人間怠惰論・非怠惰論を対比させ論理を展開しており、また労働觀についての記述も多い。これは、本時の講義内容に適合し「職業指導」科目の補助教材として最適であると判断して採用した。

各条件とも、4週間後にレポートを回収し、ついで満足度等に関する質問紙・読書材の内容に関するテストを順に実施した。被験者は、質問紙・テストの実施については事前に知らされていない。

以上の手順を要約すると次のようになる。講義→読書材呈示及びレポートの指示→(読書材の購入・閲読=家庭学習)→(講義より4週間後) レポート回収→質問紙→テスト。レポート指示のところで要約を要求するか、感想文を要求するかが異なる以外は、両条件同じ手順である。

材 料

〈質問紙〉 質問紙の構成は次の通りである。「『知的好奇心』の本は、どのくらいおもしろかったですか。」「『知的好奇心』に関連した本をもっと読みたいですか。」という、読書材に対する満足度に関する2項目。「『知的好奇心』の本は、やさしかったですか、むずかしかったですか。」「『知的好奇心』の本の内容をどのくらい理解できましたか。」という、読書材の難易度に関する2項目。いずれも7段階で評定させる。さらに「『知的好奇心』の本を {a. 2回以上読んだ, b. ひとつおり1回読んだ, c. 半分くらい読んだ, d. ところどころ読んだ, e. その他} 等の補足的項目3つも含まれている。

〈テスト〉 穴うめテストと多肢選択テストからなる。穴うめテストは、読書材中から重要と思われる文を抜きだし、そのキーワードを()におきかえてある。読書材を前・中・後に3分し、それぞれに対応する問を構成することにより、読書材全体にわたって出題してある。各問4項目・計12項目である。各問毎に、下欄に12個の語が印刷されており、被験者は、その中から()にはいる語を選択し記号で穴うめをしていく。多肢選択テストは、読書材中の重要事項であり、かつもっともらしい4つの選択肢が作成可能なものの7問を用いる。たとえば、「特殊的好奇心とは何ですか。{a. 「あれ何?」「な

ぜ？」というような幼児のみにみられる特別な好奇心。
b. 感覚遮断の実験のような特殊な状況におかれたときに生じる好奇心。
c. ある特定なことについての知識が不充分であるとわかったときに、その不充分さを埋めるために生じる好奇心。
d. 言語をつかう人間にだけみられる特別な好奇心。」など。テストは、穴うめ・多肢選択の順で7頁の小冊子に印刷して呈示。

実験日時及び場所

講義・読書材呈示は感想文条件—1979年4月26日、要約条件—27日：質問紙・テストは各条件それぞれ5月24日、25日に実施。いずれも正規の講義時間帯に通常教室で実施。

結果

最初の講義に出席し、かつ総てのデータがそろった被験者は要約条件19名、感想文条件16名である。さらにこの中から、閲読回数をきいた質問項目に対して、**a.** 2回以上読んだ、あるいは、**b.** ひととおり1回読んだところえたもののみをとりだしたところ、各条件とも14名ずつになった。これらの被験者について結果を分析する。

まず、読書材の難易度に関する2項目の質問紙結果についてみる。各項目とも7点満点、計14点で得点化した。得点が高いほど、読書材は「やさしく」より「理解できた」ことを示す。要約条件の平均は8.14、SDは2.03；感想文条件の平均は7.86、SDは2.17である。両条件とも「ふつう」よりやややさしい読書材であると判断している。従って、本実験で用いた読書材は適度の難易度を備えていたと考えられる。また、両条件間に有意な差はない。読書材の難易度の判断は、学習者の読書能力をある程度反映すると思われる。このため、要約・感想文の両条件は等質な集団であると見做される。

次に、テストの結果についてみる。穴うめテスト(12点満点)では、要約条件の平均は6.71、SDは2.55；感想文条件の平均は6.86、SDは2.29である。多肢選択テスト(7点満点)では、要約条件の平均は6.21、SDは0.94；感想文条件の平均は5.57、SDは1.05である。いずれも条件間の有意差はなく仮説を支持しない。

満足度に関する質問項目2つを、各7点満点、計14点で得点化した。得点が高いほど、読書材に対する満足度は高いと考える。これについては、要約条件の平均は10.29、SDは2.76；感想文条件の平均は9.21、SDは2.21であった。条件間の有意な差はみられない。

討論

科学的内容の読書材では、読書材中の情報と自己の既存知識を関係づけることにより感想が生じると考えられる。また、既存知識と読書材中の情報を関係づけることは、読書材の学習を促進する。このため感想文条件の学習パフォーマンスが優れることが予想された。しかし、実験結果は、この仮説を支持しなかった。この原因は幾つか考えられる。

まず第1は、一冊の読書材を読んだ場合に、要約条件の被験者でも何らかの感想をもつのではないかということである。要約を記述させるという要求によっては、読書材情報に対して感想をもつことを制御できない。このため、要約条件と感想文条件の間には、かなり共通の要因が働いていたと推測される。

また、読書感想文に関するこれまでの研究では、感想文には、あらすじ記述(要約)と区別できない低次のものや、自己の既存知識と関係づけていると考えられる高次のものなど、質的水準の違いがあることが報告されている(増田, 1977, 1978)。さらに「読書感想文の深さのレベルは、読みの深さと大きく関係てくる(増田, 1977, p.122)」という指摘もなされている。これによれば、感想文の質的水準の違いによる学習パフォーマンスの差が予想される。したがって、感想文条件では、感想文を書くことの効果は、感想文の質的水準の違いにより相殺されていたのではないかと考えられる。これが第2の理由である。

以上の2つの理由から、要約記述及び既存知識と読書材中の情報を関係づけることによる感想文記述が学習に及ぼす効果をあきらかにするためには、次のような条件下で検討することがのぞましいと考えられる。即ち、感想文条件のみを用い、感想文の水準と学習パフォーマ

ンスとの関係を比較する。この点を考慮して次の実験を行なう。

実験Ⅱ

目的

自己の既有知識と読書材情報を関係づけた感想文を記述するものは、そうでないものと比べて学習パフォーマンスは優れるであろう。この仮説の検証が主目的である。また、感想文の他の水準と学習パフォーマンスとの関係についても検討する。実験Ⅰでは、満足度についての質問項目数が少なかった。本実験では、読書活動に伴なう情意的反応の測定項目をより細分化し、これらと感想文の水準との関係について探索的に検討する。さらに、得られた結果より、実践的な示唆を導びきだすことも目的のひとつである。

方法

被験者

筆者の「教育心理学」の講義を受講している大同工業大学学生2クラス。実験Ⅰの被験者との重複はない。

手 続

まず、読書材呈示のための導入情報として「知的好奇心」と題する講義を行なった。講義では読書材に対する興味を喚起するため、新奇刺激・複雑刺激呈示により、知的好奇心の生起を実際に体験させた。新奇刺激は鹿内(1976)で用いたものを、複雑刺激は「のどちんこの役割」「ヘビのシッポはどこからか」という設問に多肢選択肢をつけたものを呈示。このあと、動機づけの種類・知的好奇心生起のメカニズム等について説明。以上を骨子とした講義を約70分間行なった。ただし、読書材の内容に直接関連する講義はしない。なおこの講義は、筆者の年間講義予定の「学習指導の心理」の章を構成する部分である。

講義終了後、本時の講義内容をさらに理解するためと、教育について考えるために最適な書物として、実験Ⅰでも用いた「知的好奇心」を呈示。各自購入・閲読後、大学所定のレポート用紙2枚程度の感想文を提出するよう

に指示した。

読書材「知的好奇心」は、本時の講義内容をさらに発展させる内容をもっていること、実験Ⅰの質問紙調査で本学の学生にとって適度の難易度をもっていることが示された等から、補助教材として最適であると判断してこれを採用した。

5週間後に感想文を回収。次いで、情意反応に関する質問紙・自由記述テスト・穴うめテスト・多肢選択テストを順に実施した。質問紙・テストの実施については実験Ⅰ同様事前に知らされていない。

実験には2クラス用いたが、いずれも全く同じ手続でおこなった。また、基本的手続は実験Ⅰと同様である。

材 料

〈質問紙〉 読書活動に伴なう情意反応の測定を行なうために質問紙を作成した。作成にあたっては、Bloom他(1971, 邦訳 p. 433-441)を参考にした。Bloomらは、情意領域に関する教育目標を1. 受け入れ(注意すること), 2. 反応, 3. 価値づけ等の5カテゴリーに分類している。しかし、これらのカテゴリー及びそれを構成する下位カテゴリーをそのまま適用するのは困難である。このため、本実験に適合するように、Bloomらの分類から3カテゴリーを採用し、計14項目の質問紙とした。これをTable 1に示す。

次に、各項目とBloomらのカテゴリーとの対応を示す。カテゴリーIはBoomらの「受け入れ」カテゴリーに対応する。このうち、I-a, bは読書材を導入するための刺激(講義)に関するものである。I-cは下位カテゴリー「意欲的受け入れ」に対応する。カテゴリーIIは「反応」カテゴリーに対応する。とくに、II-a, bは下位カテゴリー「意欲的反応」に、II-c, dは下位カテゴリー「反応への満足」に対応する。カテゴリーIIIは「価値づけ」カテゴリーに対応する。とくにIII-aは「1つの価値を受け入れること」、III-b, c, dは「1つの価値を好ましいものとすること」、III-e, f, gは「1つの価値に基づく行動」の各下位カテゴリーに対応するようにしてある。以上の項目は、できるだけ Bloom らの分類に

読書感想文の記述が科学的読書材の学習に及ぼす効果

Table 1 質問紙

カ テ ゴ リ I	a. (5週間前の) 知的好奇心の授業はどのくらい面白かったですか。	面白かった → か ら や ふ ゃ や か と つまらなかった
	b. 知的好奇心の本を買う前の気持ちはどうでしたか。	面白そう本 → だと思つた だと思つた
	c. 知的好奇心の本を買う(注文する)ときの気持ちはどうでしたか。	すばんて買つた。 → (レポートがあるから) しゃべりたく買った
カ テ ゴ リ II	a. 知的好奇心の本をどのように読みましたか。	すばんて読んた。 → (レポートがあるから) しゃべりよく読んだ
	b. 知的好奇心の本をどのように読みましたか。	夢中になつて読んた。 → たいへんなら 読んで
	c. 知的好奇心の本はどのくらい面白かったです。	面白かった → つまらなかつた
カ テ ゴ リ III	d. 知的好奇心の本を読んでつかつたと思いますか。	思う → 思わない
	a. 適切な環境さえととのえば、人間は決して怠けものでは無い」という意見にあなたは賛成ですか。	賛成 → か ら や ふ ゃ や か と 反対
	b. あなたは、知的好奇心を失はないように努力しているつもりだと思いますか。	思う → 思わない
カ テ ゴ リ IV	c. あなたが教師になったとしたら、知的好奇心をもって授業をとり入れていこうと思います。	とり入れたい → とり入れたくない
	d. 知的好奇心の本を読むのに、放課にもすすめたいです。	すすめたい → すすめたくない
	e. 知的好奇心に関する本をもっと読みたいですか。	読みたい → 読みたくない
カ テ ゴ リ V	f. 知的好奇心に関する講義をもっと受けたいですか。	受けたい → 受けたくない
	g. 知的好奇心の本の内容等に問い合わせ討論会をひらくとしたらお答えをうなづきながらいきますか。	答ねたい → 答えたくない

対応するように作成した。しかし、これより高次のカテゴリーに対応する項目の作成は、本実験では不可能である。

〈テスト〉 読書材の内容に関するテストは、自由記述・穴うめ・多肢選択の3つを用いる。穴うめ・多肢選択は実験Ⅰで用いたものと同じ。自由記述テストは、多肢選択テスト7問に含まれる4問を自由記述形式したものである。

実験日時及び場所

講義・読書材呈示は1979年5月25・26日に、質問紙・テストは6月29・30日に各クラス毎に実施。いずれのクラスも、正規の講義時間帯に通常教室で行なった。

結果

1. 群構成および感想文評定基準

群構成は感想文の評定結果に基づいて行なった。感想文の評定基準を作成する試みは、増田（1977, 1978）により報告されている。しかし、これは主に文学的読書材に対する感想文の評定を目的としている。このため、科学的読書材を用いた本実験では、そのまま採用できなかった。そこで増田の試みを参考にして、本実験に適用可能な評定基準を構成しなおした。これを次に示す。

O 感想文以前の段階

O1 論旨不明確型 本の主題と関連しているらしいが、自分でつくった概念・用語を未定義のまま多用し論旨不明確になっている。

A 単純反応の段階

A1 感想羅列型 本を読んで感じたことを断片的に羅列してある。感想文としての中心部分やまとまりがない。主題に関する言及がないか、あってもわずか。本の内容についての具体的な言及もほとんどない。

A2 要約型 章・節の展開に従って、その要約を記述。

あるいは、幾つかのトピックについて断片的に記述。幾つかの文末で「なるほどと思う」などの語で単純な意見を述べたり、「思います」を連発している。この場合、何故「そう思う」のかについての根拠が書かれていなければ、あってもわずか。根拠が誤っているもの

も含む。さらに、主題肯定論になっているが要約的なものも含む。

A3 単純疑問・批判型 幾つかのトピックについて断片的に述べ、文末で「おかしいのではないか」等の疑問を表現している。しかし、この疑問（場合によっては内容に対する批判のニュアンスも含む）を基に考えを展開しておらず、単純に疑問・批判を表現しているだけのもの。

B 主題検討の段階

B1 疑問・批判展開型 主題及びそれに関連するトピックをとりあげ、それに対する疑問や批判を述べている。これらの疑問の解決や反論を考察の中心にしている。しかし論拠は不明確であり、結論も曖昧である。

B2 体験比較型 主題及びそれに関連するトピックと自己の過去の体験を結びつけたり比較している。これにより、主題に対して賛否いずれかの論を展開している。あるいは展開しようとしている。

B3 現実社会比較型 主題及びそれに関連するトピックと現実社会を結びつけたり比較している。これにより、主題に対して賛否いずれかの論を展開している。あるいは展開しようとしている。また逆に、本の内容に基づき現実社会を批判している。

C 行動変革の段階

C1 認識変革型 本の主題を正しくとらえて考えている。単に主題を理解しようとしているだけでなく、考えるに値する問題として位置づけている。たとえば「今後も考えていこう」等の表現がみられるものや、これまでの考え方がかわったというもの。

C2 行動変革型 本の主題を正しくとらえて考えている。さらに、主題から導びかれた望ましいと思われる行動様式を具体的な行動場面に適用しようとしている。

この基準に基づき、教育心理学専攻の国立大学助手1名に感想文を評定してもらった。評定に先立ち、本実験で用いた読書材をこの評定者にも読ませてある。評定は総てのデータがそろった103名について行なった。筆者

読書感想文の記述が科学的読書材の学習に及ぼす効果

が行なった評定と実験のために依頼した評定者の評定との一致率は54.4%であった。(ただしO・A・B・Cの大カテゴリでみた評定の一致率は69.9%である)。評定の一致率は比較的低かった。このため、2人の評定が一致したものを取りだし結果の分析を行なった。(O1カテゴリーにはいるものは整理から除いた)。2人の評定が一致したものは、A1—7名、A2—29名、A3—3名、B1—1名、B2—6名、B3—2名、C1—3名、C2—0名である。被験者数が極めて少ないカテゴリーもあり、この下位カテゴリー別の群構成では結果の分析ができない。このため、幾つかのカテゴリーをまとめ、次の4群を構成した。I群(感想羅列型)—A1、II群(要約型)—A2、III群(疑問・批判型)—A3+B1、IV群(既有知識比較型)—B2+B3+C1。ここでは幾つかのカテゴリーをまとめたため、2人の評定がA3↔B1でずれているもの1名をIII群に、B2↔B3でずれているもの1名をIV群に加えた。これにより、最終的に結果が分析された被験者数はI群—7名、II群—29名、III群—5名、IV群—12名である。総て男子学生。

2. テスト結果

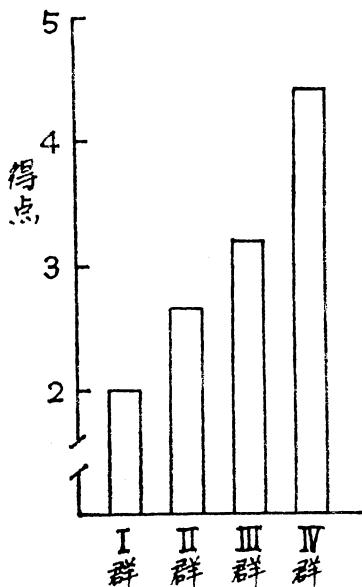


Fig. 1 記述式テスト

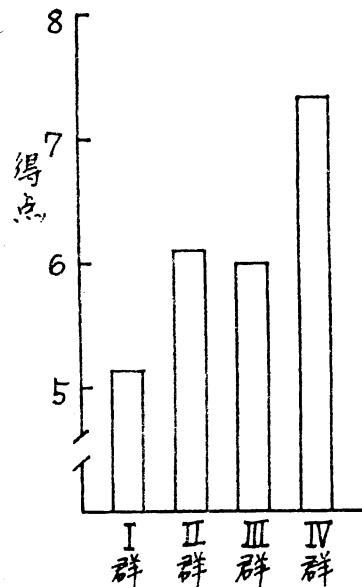


Fig. 2 穴うめテスト

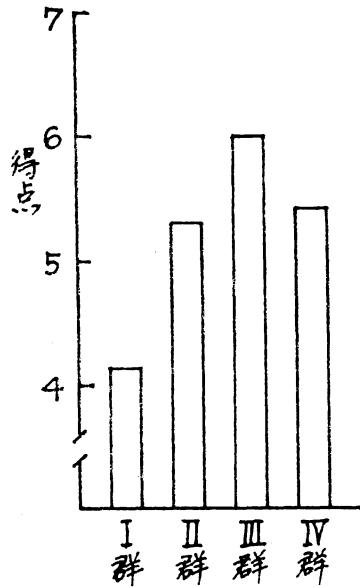


Fig. 3 多肢選択テスト

上述の群構成により、テスト結果を分析した。これをTable 2, Fig. 1, 2, 3に示す。

＜記述式テスト＞ このテストの採点は、各問2点満点、計8点満点になるような採点基準をあらかじめ作成し、それに基づき行なった。なお、群構成を知ることによる採点のゆがみを排除するため、このテストの採点は感想文評定による群構成の以前に行なってある。結果をFig. 1にみると、I群からIV群にかけて得点の上昇傾向がみられる。群間の比較では、IV群が他の群より有意に高い、あるいは高い傾向の得点をとっていた(IV群>III群, $t=1.37$, $df=15$, $p<.10$; IV群>II群, $t=2.82$, $df=39$, $p<.005$; IV群>I群, $t=3.00$, $df=17$, $p<.005$)。他の群間の比較では有意差はみられない。

＜穴うめテスト＞ 記述式テストと似た結果がみられる。群間の比較では、IV群がI群より有意に高い($t=2.38$, $df=17$, $p<.025$)得点をとること、IV群はII群より高い傾向($t=1.55$, $df=39$, $p<.10$)があることが示された。他の群間の比較では有意差はみられない。

＜多肢選択テスト＞ このテスト結果も、先の2つのテストと同様である。I群は他の群より有意に低かった

Table 2 テスト結果()内 S D

群 テスト	I n = 7	II n = 29	III n = 5	IV n = 12
記述式	2.00 (1.51)	2.66 (1.83)	3.20 (1.33)	4.42 (1.66)
穴うめ	5.14 (1.46)	6.10 (2.34)	6.00 (1.41)	7.33 (2.01)
多肢選択	4.14 (0.83)	5.31 (1.68)	6.00 (0.63)	5.42 (1.12)

(I群<II群, $t=1.73$, $df=34$, $p<.05$; I群<III群, $t=3.83$, $df=10$, $p<.005$; I群<IV群, $t=2.48$, $df=17$, $p<.025$)。他の群間の比較では有意差はみられない。

以上の結果は、既存知識と読書材中の情報との比較に基づいて感想文を記述することは、読書材中の情報の学習を促進することを示す。これは本実験の仮説を支持する。また、上に示された結果は「読書感想文の深さのレベルは、読みの深さと大きく関係してくる」という、増田(1977)による経験的示唆をも支持する結果である。

3. 質問紙結果

質問紙14項目について、各項目に対する反応が最もポジティヴなもの7点、最もネガティヴなもの1点として得点化した。この結果をTable 3に示す。この測度についての検定は、総て両側検定である。

〈カテゴリーI〉 展示された刺激である読書材を意欲的に受け入れているか否か(項目I-a)については群間の差がみられる。I. II. III群はネガティヴな方向にあり、IV群のみがポジティヴな方向にある。とくに、IV群はII群より有意に高い($t=2.42$, $df=39$, $p<.05$)得点を示している。これは、感想文の水準と展示された読書材を意欲的に受容する程度が関連することを示唆する。しかし項目I-a, bでは4群ともほぼ等しい得点を示している。これは、少なくとも本実験においては、読書材呈示に至る導入情報(講義)は、感想文の水準とほとんど関連しないことを示している。

〈カテゴリーII〉 このカテゴリーについては4項目とも一貫した傾向がみられる。全体的に見ると、III群の得点が最も低く、II群も比較的低くなっている。IV群

は、この2つの群と比して、読書材に対してより意欲的に反応し、反応による満足の程度も高い。各項目毎の群間の比較では、次のような有意な差あるいは、有意な傾向がみられた。項目II-aではIV群>II群, $t=2.31$, $df=39$, $p<.05$; IV群>III群, $t=1.85$, $df=15$, $p<.10$ 。項目II-bではIV群>II群, $t=1.86$, $df=39$, $p<.10$ 。項目II-cではIV群>II群, $t=2.76$, $df=37.1$, $p<.01$ 。項目II-dではIV群>II群, $t=3.10$, $df=37.8$, $p<.01$ 。これらは、読書材に対しいかに反応し、それによりどの程度満足を得るかが感想文の水準と関連することを示す。

Table 3. 質問紙結果()内 S D

群 カテゴリ 項目	I	II	III	IV
I	a 4.57 (1.05)	5.17 (1.09)	4.60 (1.86)	5.08 (1.19)
	b 4.14 (1.25)	3.66 (1.67)	3.80 (1.33)	4.25 (1.59)
	c 3.14 (1.36)	3.14 (1.61)	3.20 (1.60)	4.58 (1.89)
II	a 4.29 (1.28)	3.35 (1.52)	3.00 (1.41)	4.58 (1.55)
	b 5.14 (0.83)	4.45 (1.28)	4.00 (1.67)	5.25 (1.09)
	c 5.43 (0.90)	4.83 (1.26)	4.40 (1.74)	5.67 (0.62)
	d 6.14 (0.83)	5.69 (1.49)	5.00 (2.19)	6.67 (0.47)
III	a 4.86 (1.64)	4.97 (1.94)	4.20 (1.94)	5.75 (1.36)
	b 5.57 (1.05)	5.66 (1.27)	6.40 (0.80)	5.58 (1.55)
	c 5.86 (1.13)	6.31 (1.18)	5.00 (2.19)	6.42 (0.76)
	d 4.86 (0.99)	4.69 (1.56)	4.20 (1.72)	5.25 (1.42)
	e 5.14 (0.99)	4.31 (1.60)	4.80 (0.98)	5.17 (0.99)
	f 5.00 (1.41)	4.69 (1.12)	5.40 (2.25)	4.83 (1.62)
	g 4.71 (1.49)	3.66 (1.29)	3.80 (1.47)	4.42 (1.32)

読書感想文の記述が科学的読書材の学習に及ぼす効果

＜カテゴリーIII＞ このカテゴリーでは顕著な群間の差がみられなかった。次の3項目について有意な傾向がみられただけである。項目III-aではIV群>III群で $t=1.76$, $df=15$, $p<.10$ 。項目III-cではII群>III群で $t=1.91$, $df=32$, $p<.10$ 。項目III-gではI群>II群で $t=1.83$, $df=34$, $p<.10$ 。

討 論

本実験で用いた感想文評定基準による評定者間の評定一致率は比較的低かった。これには、各基準に該当する具体例を、実験のために依頼した評定者に呈示しなかったこと等、幾つかの原因が考えられる。また、この基準は実験用の試案であり、必ずしも総ての基準を定義しえなかつたことも指摘される。増田（1977, 1978）の基準では、評定者間の一致率等の信頼性に関するデータが欠けている。今後の研究により、実践事態に適用可能な評定基準を洗練していく必要がある。

しかし、本実験で用いた基準で、2人の評定者間の評定が一致したものについては、その妥当性を示す結果がみられている。即ち、感想文の水準に対応して学習パフォーマンスは向上している。とくに、自己の経験・社会的現実等の既有知識と読書材中の情報を関連づけていると評定される感想文記述者は、読書材中の情報もよく学習していることが示された。これはまた、本研究の仮説を支持するものである。

この結果はさらに、次のような実践的示唆を与えてくれる。読書材中の情報の学習促進を目的として感想文を記述させた場合は、既有知識と関連させて書かせなければならない。学習者の特質と関連するかも知れないが、単に感想文を書かせただけでは、感想文の水準に差が生じる。また、水準に応じた学習パフォーマンスは異なる。このため、既有知識と関連づけて書かせるための指導が必要であると考えられる。しかし、具体的にはどのような指導が有効であるかについては、今後検討する必要がある。

これまでの研究では、認知的側面についての実験操作が情意反応に影響を及ぼすことを報告しているものもある

（たとえば鹿内他, 1979）。しかし本実験 デザインでは、感想文の水準及び学習パフォーマンスと情意反応との因果関係については断定できない。しかしながら、本実験結果より、次のような関連性とそれに基づく実践的示唆を見いだすことができる。読書活動に伴なう情意反応を測定した質問紙結果では次のことが示された。読書材に対する意欲的反応の程度・反応から得る満足の程度（項目II-a～d）と感想文の水準は関連する。とくに既存知識比較型の感想文記述者の意欲的反応及び満足の程度が高い。また、読書材を導入するために直前に呈示された情報（講義）に対する情意反応（項目I-a, b）と感想文の水準との関連性は認められない。これらの結果は、読書材に対して意欲的に反応させる日常的な指導が、直前の導入情報より重要であることを示唆する。

さらに次のような結果もみられた。疑問・批判型の感想文記述者の学習パフォーマンスは比較的高い。しかし、読書活動に伴なう情意反応は相対的にネガティブである。読書材を批判的に読ませることが必要な事態も考えられる。けれどもこの場合、情意反応もネガティブにする可能性もあることを本実験結果は示唆する。

また、質問紙のカテゴリーIIIを構成する項目では、顕著な群間の差はみられなかった。これは、読書材の内容を、自己の行動の価値基準として採用するためには、唯一回の読書経験では不充分であることを意味するのかも知れない。

文 献

- Bloom, B. S., Hasting, J. T. & Madaus, G. F. 1971
Handbook on formative and summative evaluation
of student learning. McGraw-Hill. 梶田叡一他訳
1973 教育評価法ハンドブック, 第一法規.
- Doctorow, M., Wittrock, M.C. & Marks, C. 1978
Generative processes in reading comprehension.
Journal of Educational Psychology. 70, 109-118.
- Frase, L. T. 1975 Prose processing. In G. Bower
(Ed.) *The psychology of learning and motivation*:

- Advance in research and theory. Academic Press. 9, 1—47.
- Marks, C. B., Doctorow, M. J. & Wittrock, M. C. 1974 Word frequency and reading comprehension. *The Journal of Educational Research.* 67, 259—262.
- 増田信一 1977 感想文評価の基準 読書科学 第20巻 122—129.
- 増田信一 1978 読書感想能力の発達—読書感想文にあらわれた読み書き能力—読書科学 第21巻 65—74.
- 鹿内信善 1976 認知的コンフリクト事態での知識獲得と創造性 教育心理学研究 第24巻 207—216.
- 鹿内信善 1978 学習目標呈示の効果 I 一質的目標・量的目標呈示の検討 日本教育心理学会第20回総会発表論文集 658—659.
- 鹿内信善 1979 a 散文教材理解に及ぼす学習目標呈示の効果 読書科学 第22巻 79—88.
- 鹿内信善 1979 b 節見出し語及びファミリア語が散文教材の学習に及ぼす効果 読書科学 第23巻 1—10.
- 鹿内信善 1980 要約・ノート及びアンダーライン活動が散文教材の学習に及ぼす効果 読書科学 第24巻 1—9.
- 鹿内信善 塩田勢津子 石田裕久 1979 集団問題解決に関する研究—集団目標および集団通路の明瞭性の効果 大同工業大学紀要 第15巻 111—116.
- Wittrock, M. C., Marks, C. & Doctorow, M. 1975 Reading as a generative process. *Journal of Educational Psychology.* 67, 484—489.

SUMMARY

Two experiments were conducted to test the hypothesis that students' comprehension of scientific material would be facilitated by relating the scientific information to their previous knowledge. In the first experiment 28 male college students were assigned to read a scientific book. Fourteen were required to submit a summary of the book and 14 were required to submit a book report¹, both in 4-weeks' time. After the summaries and reports were submitted two comprehension tests were administered, i. e., a cloze procedure and a multiple choice test. There were no significant differences between the comprehension scores of the students who submitted summaries and the comprehension scores of students who submitted book reports. The experimental hypothesis was not supported.

In the second experiment 53 male college students were assigned to read a scientific book and to submit

a book report in five weeks. Free-description, multiple choice and cloze-type tests were administered to assess their comprehension. In addition, the students' attitudinal regard for the book was assessed by means of a questionnaire. The book reports were then classified into four types: (1) seven listed fragmentary expressions, (2) twenty-nine merely summarized the book, (3) five presented authentic criticisms, and (4) twelve related the obtained information to their previous experiences. The 12 students who submitted type (4) reports obtained higher scores on the three comprehension tests and more favorable attitudes on the questionnaire than the students submitting other types of reports. Their scores on the free-description test were significantly better than the students submitting type (1) and type (2) reports. Their scores on the cloze comprehension test were significantly higher than the students submitting the type (1)

reports. The 7 students who submitted fragmentary impressions, type (1) reports, obtained significantly lower scores on the multiple-choice test than the students submitting the other types of reports. The 12 students who submitted the type (4) reports tended to respond more favorably on the attitude questionnaire than the students submitting other types of reports. The five students who presented authentic criticisms, type (3) reports, showed the most negative responses to the reading materials; however, their comprehension scores were relatively high.

The experimental hypothesis was supported in the

second experiment.

¹ The term book report is used for the Japanese term *dokusho kanso-bun*, which can be literally translated as "reading impression composition." In addition to writing a summary of the book, and their thoughts and feelings about the book, Japanese students are also encouraged to write their views on the relationship between the theme of the book and their past and future life. A *dokusho kanso-bun* is somewhat different from the usual book reports written by an English-speaking student.

読書材料と理解の関係(2) —理解課題の分析—

筑波大学

池田進一**

はじめに

本研究は、「読み」の過程に関する研究の一環として、類型の異なる2つの文章における理解の機構を探ろうとするものである。第1報(池田, 1979)では、2つの文章の音読速度を指標に、「単語を有意味なかたちであらわすこと」と定義される意味的符号化(semantic encoding)の観点から理解の様相を検討した。本論文では、第1報で今後の課題とした理解課題の諸分析を報告する。

方法

材料文としては、安本(1965)の文章類型に基づき、漢文・非修飾・会話型の文章(宮本百合子「伸子」と漢文・非修飾・文章型の文章(中山義秀「厚物咲」)を選定した。両文章は、叙事的で修飾語が少ないという共通点をもつが、会話文の多少に相違がみとめられるものである。

まず、これらの2つの文章の読みやすさ(readability)をクローズ法(cloze procedure)によって調査したところ等質とみなされた。クローズ法とは、ある文章から一定の間隔で空所をつくり、読み手にその部分を推測させる方法である。

大学生48名(男24名、女24名)¹⁾を被験者にし、読みやすさが等質で、類型の異なる2つの文章—宮本百合子「伸子」および中山義秀「厚物咲」—を音読させ、その後、読んだ文章の理解に関するそれぞれ7題の質問に

Table 1 漢文・非修飾・会話型の文章

宮本百合子「伸子」の一節

伸子は、元気なく彼を見上げ、訊いた。

「——欠点をなおすからって——じゃあなたはどこが悪かったのですか——」

彼は決然肩をそびやかすようにし答えるのであった。

「私は自分が悪かったとは思わない。しかし君がそういうからそんなこともあるなら、なおそう」と云うのじゃないか」

伸子は、溜息をつき、云った。

「だからね、もう水掛論のようなことはやめにしましょう、ね。悪いと云えば二人がわるいのよ、喧嘩両成敗よ。——ただ、せめて少し物の分る人間らしく、もっと傷つけ合うことだけはやめたいいわ」

暫く黙っていた後、佃は考え深そうに云った。

筆答させた。2つの材料文をTable 1, 2に、その理解課題と解答例をTable 3, 4にそれぞれ再掲する。なお、手続きの詳細は第1報を参照していただきたい。

* Relationship between reading material and comprehension (2): A comprehension analysis.

** IKEDA, Shinichi (University of Tsukuba)

読書材料と理解の関係(2)

**Table 2 漢文・非修飾・文章型の文章
中山義秀「厚物咲」の一節**

過労が瀬谷をおとろえさせた。そのため彼は女性に無関心であることができた。彼の顔の皮膚は灰のように濁っていた。眼は飛びだして鋭かった。頭髪は脱けおち、地肌が白くすいて見えた。一度二度三度と弁護士試験の数を空しく重ねてゆくにしたがって、彼にとり試験は業苦にちかいものとなつた。恐怖と不安のため彼は受験場では全くの痴呆者だった。日々夜々諧誦しつづけた条文の一言すら思いだすことができなかつた。彼は脂汗^{あせあせ}をたらして時間一杯を最後まで苦しめた。とうとう白紙を出した。そして外見だけは昂然^{こうぜん}と場外まで歩いて来て不意にばつたりと倒れた。

Table 3 「伸子」における質問と解答例

- (1) 質問一伸子はどのように彼を見上げたか。
解答一元気なく。
- (2) 質問一彼は自分のどこが悪かったといったか。
解答一分るもんですかといった。
- (3) 質問一彼は伸子の「どこが悪かった」かの問い合わせにどのような態度で答えたか。
解答一決然肩をそびやかすようにして。
- (4) 質問一彼は自分に欠点があるのなら、どうするといったか。

解答一なおそうといった。

- (5) 質問一伸子はだれが悪いといったか。

解答一二人。

- (6) 質問一伸子は少し物の分る人間らしく何をやめようといったか。

解答一傷つけ合うこと。

- (7) 質問一佃は暫く黙っていた後どのような態度でいったか。

解答一考え深そうに。

Table 4 「厚物咲」における質問と解答例

- (1) 質問一なぜ瀬谷は女性に無関心だったか。

解答一過労のため。

- (2) 質問一彼の顔の皮膚はどのようだったか。

解答一灰のように濁っていた。

- (3) 質問一彼の頭の地肌はどのようだったか。

解答一白くすいて見えた。

- (4) 質問一試験は彼にとりどのようなものだったか。

解答一業苦にちかいもの。

- (5) 質問一なぜ彼は受験場では痴呆者だったか。

解答一恐怖と不安のため。

- (6) 質問一彼は試験のときどのような状態で苦しんだか。

解答一脂汗をたらして。

- (7) 質問一彼はどのような態度で場外まで歩いて来たか。

解答一昂然と。

結果と考察

I 各理解課題の成績と項目分析

「伸子」と「厚物咲」における各理解課題の得点とその標準偏差値を Table 5, 6 に示す。採点基準は、第 1 報で述べたように、原文にそった解答に高い得点を与えた。すなわち、原文通りの完全正答に 4 点、原文通りであるが不完全な答に 3 点、原文とは異なるが意味的には

Fig. 1 各理解課題の項目分析の結果

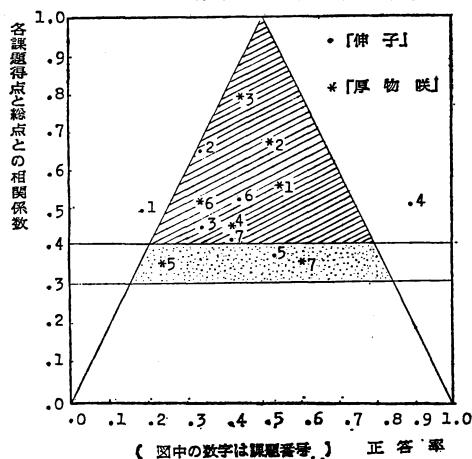


Table 5 「伸子」の理解課題における平均得点と S D

理解課題	平均得点	S D
1	0.688	1.223
2	1.354	1.480
3	1.354	1.644
4	3.583	1.164
5	2.167	1.434
6	1.688	1.626
7	1.729	1.854

n = 48

Table 6 「厚物咲」の理解課題における平均得点と S D

理解課題	平均得点	S D
1	2.104	1.717
2	1.979	1.495
3	1.771	1.729
4	1.708	1.845
5	0.938	0.998
6	1.354	1.523
7	2.500	1.775

n = 48

正答に2点、原文とは異なり不十分な答に1点、誤答および無答に0点を与えた。

Table 5, 6をもとに各理解課題の正答率と、各課題の得点と総点との相関係数 r を算出し、その関連をまとめたものが Fig. 1 である。図中で斜線内および点線内にはいるものを適切な項目とする（池田、1978）と、「伸子」の理解課題 1 と 4 はやや改善すべき点を含む項目といえよう。1 の正答率が低かったのは、解答が全体の筋のなかであまり重要な位置しめていなかったためと思われる。4 の正答率が高かったのは、遂語的な記憶によって正答が可能であり、かつ、全体の筋の把握という点で重要なものであったためと思われる。しかし、1, 4とも逸脱の程度が大きくなないことと十分な相関値を示していることから、全体的には無難な問題項目であったことが推察される。したがって、各理解課題は次に検討する因子分析に十分耐えうるものと判断される。

II 理解課題間の相関係数と因子分析

Table 7, 8 は、それぞれ 7 つの変数間の相関係数とそれらの値の有意性の検定の結果を示したものである。Table 7 の「伸子」は、Table 8 の「厚物咲」より全体に低い値であることが特徴的である。

Table 7, 8 をもとに主因子法による因子分析をおこなった結果が Table 9, 10 である。

Table 9 の「伸子」では 3 因子が抽出された。第 1 因

Table 7 「伸子」における理解課題間の相関係数と有意差検定

理解課題	1	2	3	4	5	6	7
1		*				*	
2	.356			*			
3	-.124	.218					
4	.116	.334	.234				
5	.115	-.008	.155	.119			
6	.335	.277	-.069	.120	.032		
7	.074	.152	.067	-.053	-.079	.021	

* P < .05

読書材料と理解の関係(2)

Table 8 「厚物咲」における理解課題間の関係係数と有意差検定

理解課題	1	2	3	4	5	6	7
1		*	*				
2	.291		***				
3	.331	.953					
4	.225	-.025	.039		**		
5	.091	.028	.066	.498			
6	.197	.209	.266	.068	.225		
7	-.108	.237	.232	-.104	-.174	.067	

* P < .05 ** P < .01 *** P < .001

Table 9 「伸子」の理解課題における因子負荷量

理解課題	因子1	因子2	因子3
1	-.504	.381	-.127
2	-.786	-.042	.260
3	-.252	-.670	-.007
4	-.437	-.196	-.156
5	-.127	-.139	-.389
6	-.431	.262	-.119
7	-.119	.006	.256
寄与率(%)	55.8	30.0	14.1

Table 10 「厚物咲」の理解課題における因子負荷量

理解課題	因子1	因子2
1	-.338	-.220
2	-.946	.149
3	-.996	.075
4	-.087	-.667
5	-.118	-.701
6	-.283	-.179
7	-.200	.255
寄与率(%)	65.9	34.1

子は、課題1, 2, 4, 6で負荷が高いことから遂語的な記憶による理解因子と解釈される。第2因子は課題3で負荷が高い。第1因子に高い負荷量を示した課題1では「元気なく」、課題2では「分るもんですか」というように1つの意味的な単位を記憶すれば正答できうるのに比べ、この課題3では「決然」、「肩を」、「そびやかすように」という3つの意味的な単位を記憶せねばならない。したがって、第2因子は冗長な言辞の遂語的な記憶による理解因子と解釈される。第3因子は課題5, 7で負荷が高い。課題5は特定の数字を答えさせるものであり、²⁾ 課題7は全体の筋とは直接には関連のうすいものである。ここから、第3因子は特殊な言辞の遂語的な記憶による理解因子と解釈される。

一方、Table 10 の「厚物咲」では2因子が抽出された。第1因子は課題2, 3でとくに負荷が高く、ついで課題1, 6の順である。2は「灰のように」、3は「白くすいて」というように両課題とも具体的な色彩名を解答せねばならない。1と6は主人公についての客観的な事実を解答させるものである。したがって、第1因子は遂語的な記憶による理解因子、あるいは客観的な事実の記憶による理解因子と解釈される。第2因子は課題4, 5で負荷が高い。両課題とも「業苦」、「恐怖と不安」といった主観的かつ情動的な語句を解答せねばならないという共通点をもっている。ここから、第2因子は主観的な事実の記憶による理解因子と解釈できよう。

以上2つの因子分析の結果を内田(1975)の研究を参考に考察してみよう。彼女は、「意味的展開のある言語材料(物語)における言語情報は、まず第1レベル(聴覚的符号化)での処理がなされることによって構造的に把握され、次に、第2レベル(意味的符号化)での処理によって、その情報は広い文脈に関連づけられてはじめて十分な理解に至る」と仮定した。そして、彼女は、5歳児を被験者に、物語の学習過程における言語化が、物語の記憶と理解にどのような効果を及ぼすかを実験的に検討した。手続きとして、物語を学習する時に教示によって、一文ごとに声に出して復唱する条件(外言群)、同

じく心の中で復唱する条件(内言群), ただ聞きとるだけの条件(統制群)を設け, 条件間の成績を比較した。その結果, ①外言化することによって文章の逐語的構造の記憶が促進されること, ②内言化することによって物語の基本的伝達内容の理解が促進されること, その際, 材料文外の表現を用いて答える傾向や主人公の気持に共感する主観的表現が見られることなどが明らかになった。

本研究の2つの因子分析で第1因子として抽出された「遂語的な記憶による理解因子」は, 上述の言語情報処理における第1レベルの聴覚的符号化と深い関連をもつものであろう。むろん, 本研究の「音読」は聴覚的情報のみならず視覚的情報にも依存しているという点で内田の「外言」とは異なる。しかし, 「言語材料が視覚的に提示されても, 音でリハーサルされ, 聴覚的表象(表現)で記憶されるらしい」(大村, 1977)という指摘から考えると, 聴覚的情報と視覚的情報との複合的な作用の効果の問題は残されようが, 「音読」と「外言」とを相応するものとみなすことは可能であろう。この前提にたつならば, 「音読」のもつ音韻レベルでの聴覚的手掛けや発話に伴なう筋感覚的手掛けが, 材料文の遂語的構造への定位を助けた結果, 第1因子としての「遂語的な記憶による理解因子」が抽出されたと考えられるのである。

「伸子」における第2, 第3因子は「遂語的な記憶による理解因子」のなかにもいくつかのレベルが存在することを示唆するものと思われる。

「厚物咲」での第2因子に負荷の高かった課題4, 5の解答に「業苦」「恐怖と不安」という主観的, 情動的表現が含まれていたことは, 内田の実験の内言群で, 「主人公の気持に共感する主観的表現が見られた」という結果と対応している。ここから, 「厚物咲」における第2因子「主観的な事実の記憶による理解因子」は, 第2レベルの意味的符号化と関連をもつものと考えられる。読み手は, 意味的符号化での処理によって, 表層の文脈的構造をとらえるのみならず, 登場人物の心理を(あるいは書き手の心理をも), より深く共感的に理解していくものと推量される。

以上の考察をまとめると, 言語情報処理過程における聴覚的符号化から意味的符号化へという図式は, 本因子分析における「客観的事実の記憶による理解因子」(「遂語的な記憶による理解因子」)から「主観的な事実の記憶による理解因子」へという図式に相応するものといえよう。換言すれば, 本実験から得られた結果は, 2つのレベルの符号化の存在を因子論的に傍証するものと思われる。

III 理解課題の誤反応分析

1問4点満点とした理解課題で3点以下の解答を誤反応とし, その数と割合をまとめたものがTable 11である。これから有意差検定をした結果, 次の諸点が明らかとなった。

Table 11 理解課題の誤反応傾向

材料文	カテゴリー	原文通りであるが不完全な答	意味的正答	意味的に不十分な答	誤答	無答
伸子	19 (8.3%)	33 (14.4%)	52 (22.7%)	24 (10.5%)	101 (44.1%)	
厚物咲	40 (16.4%)	16 (6.6%)	73 (29.9%)	39 (16.0%)	76 (31.1%)	

1. 全体的には, 材料文間で各カテゴリ一間の割合は有意に異なっていた ($\chi^2=23.351$, $df=4$, $P<.001$)。
2. 「遂語的記憶」に関連するとと思われる「原文通りであるが不完全な答」のカテゴリでは, 「厚物咲」の率の方が有意に高かった ($\chi^2=7.093$, $df=1$, $P<.01$)。
3. 「意味的正答」と「意味的に不十分な答」とのカテゴリは, 内田の実験の内言群で見られた「材料文外の表現を用いて答える傾向」と関連すると思われる。両カテゴリをこみにして検定すると, 材料文間で差はなかったが($\chi^2=0.021$, $df=1$, n.s.), 「意味的正答」のみでは「伸子」の率の方が有意に高く ($\chi^2=7.845$, $df=1$, $P<.01$), 「意味的に不十分な答」のみでは「厚物咲」の率の方が有意に高かった ($\chi^2=34.077$, $df=1$, $P<.001$)。
4. 「無答」のカテゴリでは「伸子」の率の方が有

読書材料と理解の関係(2)

意に高かった ($\chi^2=8.469$, $df=1$, $P<.01$)。

第1報で述べたように材料文間で全理解課題の成績に差はなかったが、こうして個々の反応を分類して比較してみると、その反応パターンはかなり相違していることがわかる。

「原文通りであるが不完全な答」のカテゴリーで「厚物咲」の率の方が高く、「意味的正答」のカテゴリーでは「伸子」の率の方が高かったのは、文章の類型上の特徴に帰因すると思われる。「厚物咲」は「伸子」に比べると、論理的で硬質な文章であるから、読み手は、限られた場面の実験室内では、語句を意味的に洗練したり、読み手自身の語りに変えたりすることは困難であったため、このような結果になったと類推される。逆に、「伸子」は会話文であるから、情景や登場人物の心理をとらえられれば表現の細部にこだわらなくても理解した結果、「意味的正答」の率が高くなったものと思われる。

しかし、以上のような考察を結論づけるためには、理解課題の結果を材料文間で同列に論じられるよう理解課題そのものをより洗練した形式にしていくことが必要であろう。

要 約

大学生を被験者に、困難度が等質で類型の異なる2つの文章—「伸子」および「厚物咲」—を音読させ、その後、読んだ文章の理解に関するそれぞれ7題の質問に筆答させるという実験をおこなった。本報告では、それらの理解課題についていくつかの分析をおこなった。

1. まず、各理解課題の成績を算出した。次に、項目分析をおこなったところ、各項目ともほぼ無難なものであることが明らかとなった。

2. さらに、理解課題間の相関係数を算出した。そして、これをもとに主因子法による因子分析にかけた結果、「伸子」では3因子が、「厚物咲」では2因子がそれぞれ抽出された。「伸子」の第1因子は遂語的な記憶による理解因子、第2因子は冗長な言辞の遂語的な記憶による理解因子、第3因子は特殊な言辞の遂語的な記憶に

よる理解因子と解釈された。「厚物咲」の第1因子は、「伸子」の第1因子と同様、遂語的な記憶による理解因子、あるいは客観的な事実の記憶による理解因子、第2因子は主観的な事実の記憶による理解因子と解釈された。

こうした結果は、内田(1975)の研究を参考に、主に言語情報処理過程における聴覚的符号化と意味的符号化的観点から考察された。

3. 誤反応分析からは、2つの材料文間で誤反応パターンが異なることが見出された。

註

(1) 男女差を検定してみると、第1報での「読速度」、「理解度」、「読速度と理解度の関係」、本報告での「各理解課題の成績と項目分析」、「理解課題間の相関係数」、「理解課題の誤反応分析」のいずれにも統計的な有意差は全く認められなかった。

(2) McConkie, Rayner & Wilson(1973)によると、一定の文章に関して数字を問う質問は、一般的な事実を問う質問などと質的にかなり異なることが示唆されている。

文 献

- 池田 央 1978 テストで能力がわかるか 日本経済新聞社
池田進一 1979 読書材料と理解の関係(1) 一音読速度からの分析— 読書科学 23, 4, 116—121.
McConkie, G.W., Rayner, K. & Wilson, S.J. 1973 Experimental Manipulation of Reading Strategies. *Journal of Educational Psychology*, 65, 1, 1—8.
大村彰道 1977 記憶と言語 東洋, 坂元 昂(編) 学習心理学 新曜社
内田伸子 1975 幼児における物語の記憶と理解におよぼす外言化・内言化経験の効果 教育心理学研究 23, 2, 19—28.
安本美典 1965 文章心理学入門 誠信書房

SUMMARY

The purpose of this study was to identify the memory factors underlying reading comprehension of two different contextual styles. A conversational-colloquial style is represented in the novel *Nobuko* by Y. Miyamoto, and a narrative-literary style is represented in the novel *Atsumonozaki* by Y. Nakayama. Forty-eight college students, 24 of each sex, orally read passages from each novel. The readability levels of the two passages were equal.

The students' reading comprehension was assessed with seven questions for the passage from each novel. Item analyses indicated suitable reliabilities for the correlation analyses. The inter-item correlation

matrices were factor analyzed, utilizing principal components extraction procedures. Three memory factors were identified in the comprehension of Miyamoto's conversational-colloquial style: I. Verbatim Memory, II. Redundant Verbatim Memory, and III. Specific Verbatim Memory. Two memory factors were identified in the comprehension of Nakayama's narrative-literary style: I. Verbatim Memory of Affective Content, and II. Verbatim Memory of Objective Information. Analyses of the errors on the comprehension items also disclosed differences in the types of errors occurring for the two contextual styles.

認知一発話の言いよどみにかんする内省報告の分析*

筑波大学

田中 敏**

問題

言語理解にかぎらず、一般に意味の把握をテーマとする研究においては、当該の理解の基準を決定することが、困難な問題の1つになっている。すなわち、たんに「理解が生じた」といっても、その程度や内容はさまざまであり、個人間かつ個人内で変動はきわめて大きい。このことは、理解の研究において当然考慮されなければならない要因である。たとえば、ある文章にたいする読み手の読速度は、かれの意図する理解のレベルに強く影響されるだろう。

そのような理解の多様性について、操作するにしろ統制するにしろ、そのバラツキを生み出すメカニズムを知っておくことは重要であると考えられる。そこで本研究では、理解のメカニズムをより広い認知の枠組みのなかへ移して、対象にたいする多様な「読み取り」の過程を観察することが、計画された。

採用された手法は、内省法である。そのとき次の2点が注意された。1つは、被験者の認知に目標をあたえること、であった。このため、認知は発話と組み合わせられ、認知一発話(cognitive speaking)という実験事態が構成された。ここでは、認知過程に発話という目標をあたえることによって、その過程が被験者の意識に係留しやすくなる、ということが期待されている。また、実際の認知や理解が単独でおこなわれることはありえず、つ

ねに全体の精神活動の一環として現われる、ということが考慮されている。

もう1つの注意点は、内省法の適用範囲を限定すること、であった。このため、認知一発話において発生する言いよどみ現象(hesitation phenomena)⁽¹⁾にかんしてのみ、被験者に内省報告が求められた。というのは、言いよどみとは発話が流暢に進まず、意識的な情報操作が要求される現象であり、Smith & Miller(1978)の言う「正確な内省報告が保証される過程」と考えられたからである。すなわち、「自動的過程があまりにすばやく経過されるのはちがって」、言いよどみのような「統御的過程(controlled process)は被験者の知覚へと接近しうる可能性をもつであろう」(p.361)。

方法

目的

言いよどみについての被験者の内省報告にもとづき、認知一発話のメカニズムを解明する。

期日

1978年7月3・4・5日。

被験者

大学生24人(男13人、女11人)。

道具

シルエット絵(実験者の創作、Fig. 1), テープレコーダー2台, マイクロホン。

手続き

実験は発話セッションと内省セッションに分かれる。

1)発話セッション: 実験者と1人の被験者が机をはさん

* Introspective reports of reasons for hesitations during cognitive speaking.

** TANAKA. Satoshi (University of Tsukuba)

標本) ためである。



Fig. 1 提示絵

で向かいあう。実験者は被験者に教示をあたえる——「これから1枚の絵をお見せします。その絵を見て、そこになにが描かれているかを、簡単にひとつの文で説明してください。なお、絵を見たらすぐに話し始めてください」(圈点は強調部分)——。教示後、実験者はシルエット絵を机上に提示し、この絵についての被験者の発話をテープレコーダー(1台め)に録音し、同時に紙に書き留める。2)内省セッション: 実験者は、机の上に提示されていた絵を取り去り、被験者に、前セッションの発話中に生じた言いよどみについて内省報告を促す。そのとき録音されていた発話が再生され、書き留められた発話が提示されて、次のような質問がおこなわれた——「なぜ言いよどんだのですか」・「ここで言いよどんだとき、なにを考えていましたか」——。被験者の内省報告は、テープレコーダー(2台め)に録音された。

データの取り扱い

データとして発話セッションから発話標本が、また内省セッションから内省報告が得られた。分析においては、各発話標本内の言いよどみがなぜ発生したかが、それぞれの内省報告を手がかりとして検討された。そして、これらの検討相互が矛盾しあわないような心理学的过程が、仮定された。

なお、実際に検討がおこなわれたのは15標本であり、残り9標本が捨てられた。というのは、絵の説明が1文でなかつたり(3標本)、内省報告が十分でなかつた(6

結果

以下に、認知一発話において被験者がおこなった代表的な遂行を4つとりあげ、内省報告を利用して検討を試みる。

1) 人間についての語の探索

発話標本No.11(男)

A サーカスのB調教師がC動物にD芸を仕込んでいる。²⁾

内省報告

人間について、「飼育係」→「ピエロ」→「調教師」の順に語を思い浮かべ、人間が「むち」をもっていることから、「調教師」が適當だと思ってそう言った。

検討

「飼育係」→「ピエロ」→「調教師」という語の探索経路から、次のことが示唆される。すなわち、「飼育係」が思い浮かんだ時点では、人間がピエロのように扮装していることも、調教師としてむちをもっていることも加味されていなかった。しかし新しい特徴が追加されるにつれ、被験者は新しい特徴とそれまでの特徴とを調和させるような概念をもつ語を、探索していったのではなかろうか。

2) 動物についての語の探索

発話標本No.12(女)

A サーカスのBこの玉に乗っているCライオン(かな)がD芸を仕込まれている。

内省報告

動物に関心をもって言い始めた。動物について、「ライオン」・「トラ」・「ネコ」が思い浮かんだが、『たてがみ』があるところから「ライオン」を選んだ。

検討

ここでは、「ライオン」・「トラ」・「ネコ」という語がもっているそれぞれの概念と、これらの語の連想の契機となった特徴との間に、比較が起こってい

る。そのとき被験者は、『たてがみ』という特徴にしたがって、³⁾「ライオン」を選んだ。それゆえ次のことが示唆される。すなわち、一度想起された概念によって今度は、知覚された諸特徴のチェックがおこなわれた。その結果、『たてがみ』が決定的な特徴として浮かび上がったのではなかろうか。

3) 行為についての語の探索

発話標本No.2 (女)

A サーカスでB ピエロがC ライオンを使っている

内省報告

Cのところへ来て迷ってしまった。「ピエロ」が「ライオン」になにかしていることを言い表わそうとしたが、どんなコトバを用いたらしいか……。『曲芸』・『玉乗り』・『ピエロとライオンの親しそうな関係』などのいくつかのイメージのなかから、出て来たコトバは「使っている」だった。

検討

「使っている」は、被験者もっていたイメージを十分反映しているとは言えず、かろうじて述部としての構文上の役割を果たしているにすぎない。したがって次のことが示唆される。すなわち、認知された諸特徴にたいして語探索が十分に成功しないばかり、かなり一般的な概念をもってそれらの特徴が表現され、発話の進行が間に合わせられるのではなかろうか。

4) 1文の構造の探索

発話標本No.22 (男)

A サーカスのB 猛獣使いがC ピエロの（あっ）／サーカスのピエロがD 猛獣使いを／の練習をやっている⁴⁾

内省報告

「ピエロ」は最初から頭に浮かんでいたが、言い忘れたから付け足した。「(あっ)」のところでは、「猛獣使い」を述語として、後に持って来ようとした。

検討

「(あっ)」の前の言語表出と内省報告から考えると、

被験者は発話を開始したとき、あらかじめ一定の文構造を準備していたとはいえない。しかし「(あっ)」のところで、「猛獣使い」が述部の意味として固定されることによって、急に文を終結する動向が明瞭になった。したがって、述部の意味の把握が、発話における1文の構造を決定するさいに重要であると示唆される。

なお、上にとりあげた以外の発話標本とそれに対応する内省報告とを、付録として後にまとめておく。

考 察

認知一発話が異なる2系統の遂行の協応によって組織されている、ということが知られた。その1つは「語の探索」であり、もう1つは「構造の探索」である。この知見は、Maclay & Osgood (1967) の「符号化のさいの体制化の2つのレベル」の実在を、確証するように思われる。すなわち、「われわれは一方を語い的（意味的）レベル、他方を文法的（構造的）レベルと呼べばよいかもしれない。……あたかも話し手は、まず構造の選択をしておいて、その後で多くの利用可能な選択項目から的確な語い項目をちゃんと選択する、というふうなのである」(p. 322)。

このような、ただ言語レベルだけでの議論に、本研究はさらに次のような認知レベルの知見を付け加えることができる。すなわち、語の探索において知覚された特徴は有意味にまとまるが、そのまとめりは、語のもつ一般概念にもとづく（検討例1・2・3参照）。また、構造の探索において知覚された関係は構造的に表現されるが、その構造的表現の遂行には、述部成分が中心的役割を果たす（検討例4参照）。

以上のように本研究では、認知と発話のあいだの機能統合（すなわち一体的な情報処理）のメカニズムについて、若干の予想をおこなうことができた。しかし、これらのいわば逸話的（anecdotal）な知見は、今後の系統的な研究のための、ただ準備的な価値をもっているにすぎない。

要 約

本研究では、大学生の被験者たちに絵画説明課題をあたえ、その説明中の言いよどみを契機として、認知一発話のメカニズムを内省させた。その結果、次の知見が得られた。

1) 認知一発話は、「語の探索」と「構造の探索」との協応的過程である。

2) 語の探索においては、一般概念によってこそ、知覚された特徴が有意味にまとめられる。

3) 構造の探索においては、述部の意味的予想にもとづいてはじめて、知覚された関係が構造的に表現される。

付 錄

1) 動物についての語の探索

発話標本No.5 (女)

A ネコが (ライオンじゃないかな) ネコが B 玉の上に乗って C ひとが D 芸をやらせる／やさ／やらせている

内省報告

最初動物のシルエットを見たとき、「ネコ」だと思って、そう言った。そのあとすぐ「ライオン」かとも思ったが、体が小さいし、すでに「ネコ」と言つたので「ネコ」にした。『たてがみ』には気付かなかつた。

発話標本No.13 (男)

A むちを持ってるひとが B 玉に乗ってるライオンか C 知らんけどもこれを調教している

内省報告

動物については、『手の形』・『尾』・『たてがみ』から、「ライオン」と決めた。(実験者の質問「その動物はライオンにしては体が小さいということに気付いていたか」にたいして)——体が小さくても、『たてがみ』から「ライオン」と判断した。

2) 行為についての語の探索

発話標本No.1 (女)

A ピノキオが B (なんかピノキオじゃないかな) C 玉乗りの (あっこれライオンかな) ライオンを D 指導している

内省報告

行為について、「飼育」・「訓練」・「指導」が思い浮かんだが、まず「飼育」は『玉乗りをさせている』ことと結びつかないので、言うのをやめた。次に「訓練」は、人間と動物の関係に厳しさを感じさせるので、適切でないと思った。というのは、人間と動物は『一緒に遊んでいる』または『じゃれあってる』ように見えたから。けっこう「指導している」と言ったのだが、他に適当な語も浮かばなかつたから。

発話標本No.10 (男)

A サーカスで B ピエロの調教師が C ライオン D オン玉乗りを E 教えている

内省報告

「ライオン」と言って、そこで「ライオン」にたいする行為として「調教する」が浮かんだが、「調教師」と重複するので、「教えている」と言うことにした。

発話標本No.21 (女)

A こどもがいたずらしているのを B むち打っている

内省報告

「いたずら」を「むち打つ」のは、自分でも大げさだと思った。ほんとうは「おしおきしている」のようなコトバを言いたかったのだと思う。しかし話しているときには、「むち打つ」以外に思いつかなかつたので、そう言った。

発話標本No.24 (女)

A ライオンがまりの上に乗っていて B それを教えているところ芸を／玉乗りを

内省報告

「それを」を説明するつもりで「芸を／玉乗りを」と言った。最初『玉乗り』のイメージを持っていたのだが、その語が思い出せなくて、「芸」で間に合

認知一発話の言いよどみにかんする内省報告の分析

わせたら、「玉乗り」が思い浮かんだので続けて言った。

3) 1文の構造の探索

発話標本No4（男）

A サーカスの調教師がライオンに玉乗りを教えている

内省報告

まず人間を見て、鼻が高くて、ピノキオに似ていると思った。次に動物のほうを見て、この動物はなんだろう、ひげがはえてる、あっライオンだな、玉に乗ってる、あっ調教してるんだな、と思った。そして人間は山高帽をかぶっていたので、扮装している、あっサーカスだなと思い、そこで話し始めた。

発話標本No6（男）

A サーカスの場面でB（これ）C調教師かピノキオみたいなかんじのひとがライオンを玉の上で／玉の上に乗せてDおどらせている

内省報告

「玉乗り」が、頭に浮かんでいた。つまり「ライオン」を玉に乗せ、そしてそれからなにかをさせる、という感じ。

発話標本No7（男）

A サーカスBのライオンをC調教している調教師

内省報告

「サーカス」の場面である、と思った。もう少し絵を見てみると、人間のシルエットから「ピノキオ」と浮かんだ。そして「ピノキオ」と「ライオン」とで、どっちを先に言おうか迷った。一応その「ピノキオ」は置いた。「ライオン」を先に言うことにした。

発話標本No17（男）

A 動物の調教Bです

内省報告

教示の「ひとつの文で説明せよ」は知っていた。さまざまなイメージをもっていた。それらを言い表わそうとした。

発話標本No18（男）

AひとりのひとがB 玉乗りをしているライオン C（どうしよう）ライオンをD指揮している

内省報告

Bのところへ来たとき、その直前の「ひとりのひとが」をやめて、「ライオンがどうする」と一気に言おうと思った。それで、「どうする」に相当する適当な動詞を考えていたが、それがつい「玉乗りをしている………」と口に出してしまったものだから、困った。けっきょくそのコトバは、最初の「ひとりのひとが」に続けることにした。

引用文献

Hörmann, H. 1978 Meinen und Verstehen : Grundzüge einer psychologischen Semantik. Suhrkamp.

Maclay, H., & Osgood, C. E. 1967 Hesitation phenomena in spontaneous English speech. (Jacobovits, L. A., & Miron, M. S. [Eds.] Readings in the psychology of language. Prentice-Hall Inc., 305—324.)

Smith, E. R., & Miller, F. D. 1978 Limits on perception of cognitive processes : A reply to Nisbett and Wilson. *Psychological Review*, Vol. 85, No 4, 355—362.

註

- (1) 言いよどみ現象とは、発話中に生じる有声の休止（たとえば「エート」）のような、なんらかの発語停滞である。
- (2) アルファベットは、言いよどみが発生した箇所を示す。
- (3) 『 』は、語として実現される以前の情報またはイメージを示す。発話セッション中は、被験者にそのイメージに対応する語が思い浮かばなかったということを、実験者は確認した。
- (4) ／は、言い直しの箇所を示す。

SUMMARY

The purpose of this study was to investigate the relationship between language and thought in terms of *Aktualgenese der sprachlichen Außerzug* (Hörmann, 1978). Twenty-four students, 13 males and 11 females, were asked to explain a picture of two figures, a human and an animal. They were then asked to report reasons for the hesitations occurring in their explanations.

The following conclusions are based on an anal-

ysis of the students' reports. Cognitive speaking appears to be a coordination of word-explorations and structure-explorations. During their hesitations the students attempted to cluster the features of the figures and to select appropriate semantics for the product; and they attempted to express the perceived relationship between figures and to select the appropriate semantics for the predicate.

会 報

公開研究会（1979年9月22日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：湊吉正常任理事、司会：桑原隆会員、主題「分析的な読み」

公開研究会（10月13日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：今井靖親会員、司会：阪本敬彦常任理事、主題「読みの治療と指導——第1回日本ハワイ読書会議報告——」

常任理事会（10月13日）

出席 岡本会長 倉沢 阪本各常任理事

欠席 滑川副会長 福沢 増田 淳 室伏 望月各常任理事

1. 読書科学刊行の件

第23巻第2・3合併号（通巻88・89合併号）は予定通り1979年9月30日付で刊行した。第23巻第4号（通巻90号）は12月30日付で刊行の予定で、この号で1979年度の出版が完結する。室伏編集長欠席のため阪本事務局長より以上のように報告があった。

2. 博報賞の件

今回は選にもれたとの連絡が入った。推薦書は2年間有効で、次年度にもう一度審査される。以上のように阪本事務局長から報告があった。

3. 日本読書学会第24回研究大会の件

1980年度の夏の大会は、8月5～7日にマニラで開催される第8回世界読書会議の日程と国内の関連学会の日程とを考慮して、7月30日、31日の2日間、東京で開催することに決定した。

4. 第8回世界読書会議の件

この大会には、日本から5件の発表申込み（石原敏道、小谷昌恩、乳井克憲、漢那憲治、阪本敬彦の各氏）が提出されており、11月に受理されるかどうかが決ま

る。今回も学会としてツアーを編成して参加者を大勢送りたい。以上のように阪本事務局長から報告と提案があり、これを承認した。

公開研究会・近畿大会（10月26日）

午後2時より大阪屋大ホールで開催。主催日本読書学会、後援大阪府学校図書館協議会・大阪市学校図書館協議会・京都府学校図書館協議会。会員研究発表；岩崎本佳会員「絵本について」大前知子会員「知識的な読み物の読書指導・その拡充と深化をめざして」講演；深川恒喜理事「新しい教育課程と学校図書館」

公開研究会（11月17日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：井上尚美会員、司会：湊吉正常任理事、主題「読みの指導における発問（その2）」

常任理事会（12月14日）

出席 岡本会長 滑川副会長 阪本 増田各常任理事
欠席 倉沢 福沢 淳 室伏 望月各常任理事

1. 役員選挙の件

選舉管理委員会から開票結果が報告され（別項参照）これを承認した。

2. 日本読書学会第24回研究大会の件

1980年7月30日・31日開催予定のこの大会の会場として東京都立教育研究所を借りられるよう、滑川副会長から交渉していただくことを決めた。

3. 第8回世界読書会議の件

日本からの5件の発表は全部受理された。ツアーについては、8月1日（金）出発、台北3泊、マニラ4泊、8月8日帰国のコースで複数の旅行代理店に見積りを出させたい。阪本事務局長から以上のように報告と提案があり、これを承認した。

4. 常任理事指名の件

会則第11条による1980～1981年度の常任理事指名に

については、岡本奎六、村石昭三両氏を指名して就任を依頼したい旨、滑川副会長から提案があり、これを承認した。

5. IRA会員受け入れの件

10月11日にミシガン州のIRAグループが来日したので、阪本事務局長が日本の読みの教育事情について講演し、柳内由紀子会員がこれを補佐した。11月16日にはホンコン読書学会を設立準備中のチャン博士夫妻が来日したので阪本事務局長が会見して意見交換を行なった。以上の報告を承認した。

役員選挙開票結果（1979年12月14日・選挙管理委員会）

A. 理事選挙

- (1) 有権者数 486
- (2) 投票数 102
- (3) 無効投票 3
- (4) 有効投票 99
- (5) 理事選挙の延べ投票数 5名連記×99=495
- (6) 理事当選者 20名

当選 阪本 敬彦 67	当選 出雲路 猛 15
当選 倉沢 栄吉 52	当選 高木 和子 14
当選 滑川 道夫 38	当選 野地 潤家 14
当選 福沢 周亮 30	当選 村石 昭三 12
当選 大村 はま 27	当選 尾原 淳夫 11
当選 岡本 奎六 27	当選 深川 恒喜 11
当選 湊 吉正 25	当選 井上 尚美 10
当選 望月 久貴 24	当選 田近 洋一 10
当選 増田 信一 18	当選 井上 敏夫 9
当選 室伏 武 18	当選 岩坪 昭子 9
次点 岡田 明 7	

B. 監事選挙

- (1)～(4) 理事選挙と同じ
 - (5) 監事選挙の延べ投票数 2名連記×99=198
 - (6) 監事当選者 2名
- | | |
|-------------|------------|
| 当選 山本 晴雄 34 | 当選 平沢 薫 32 |
| 次点 桑原 隆 4 | |

C. 常任理事選挙

- (1) 有権者数 20
 - (2) 投票数 16
 - (3) 無効投票 0
 - (4) 有効投票 16
 - (5) 常任理事選挙の延べ投票数 5名連記×16=80
 - (6) 常任理事当選者 5名
- | |
|-------------|
| 当選 阪本 敬彦 14 |
| 当選 福沢 周亮 13 |
| 当選 増田 信一 12 |
| 当選 井上 尚美 7 |
| 当選 湊 吉正 7 |
| 次点 岡本 奎六 4 |

D. 副理事長選挙

- (1)～(4) 常任理事選挙と同じ
 - (5) 副理事長選挙の延べ投票数 16
 - (6) 副理事長当選者 1名
- | |
|-------------|
| 当選 倉沢 栄吉 10 |
| 次点 村石 昭三 2 |

（次点2名同点のため抽せんにより決定）

公開研究会（1980年1月12日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：首藤久義会員、司会：村石昭三理事、主題「イギリスにおける国語教育——入門期の読みの指導をめぐって——」

常任理事会（1月12日）

出席 岡本会長 倉沢 阪本 福沢 増田 望月各常任理事 井上 村石各新常任理事

欠席 滑川副会長 湊 室伏各常任理事

1. 読書科学刊行の件

第23巻第4号（通巻90号）は1979年12月30日付で発行したことが報告された。

2. 日本読書学会第24回研究大会の件

1980年7月30日・31日開催予定のこの大会の会場とし

会 報

て、東京都立教育研究所が正式に決定した。会長指名により大会準備委員会を組織することとし、滑川道夫（委員長）倉沢栄吉、井上尚美、岡本奎六、阪本敬彦、福沢周亮、増田信一、湊吉正、村石昭三、桑原隆、首藤久義の11氏が指名された。

3. 第8回世界読書会議の件

この大会に参加者を送るツアーについては、複数の旅行代理店から見積りを取ったが、検討の結果、ユニオン・エアー・サービスを指定代理店としたい。以上のように阪本事務局長から報告と提案があり、これを了承した。

4. 1980～81年度役員の職務分掌の件

下記の通り決定した。

総指揮 滑川道夫 倉沢栄吉

編集委員会 出雲路猛 尾原淳夫 阪本敬彦

高木和子 田近洵一 野地潤家

福沢周亮 増田信一

研究委員会 井上尚美 岡本隼六 湊 言正

井上敏夫 岩坪昭子 大村はま

村石昭三 室伏 武

庶務委員会 阪本敬彦 深川恒喜 望月久貴

公開研究会（2月16日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：島岡丘氏（筑波大学）、司会：渢吉正常任理事、
主題「国語教育と外国語教育の接点」

公開研究会（3月8日）

午後2時半より文京区立窪町小学校で開催。

講師：岡本奎六会長、司会：滑川道夫副会長、主題「日本の詩書心理学研究の動き」

當任理事會（3月8日）

出席 岡本会長 滑川副会長 倉沢 阪本 福沢 増田
　　望月各當任理事 井上新當任理事

欠庶、湊、宗岱各當任理事

1. 昭和54年度事業終了の件

事務局から日本読書学会昭和54年度事業記録が報告され、反省の討議が行われた。

昭和54年度における常任理事会出席状況

		出席回数	欠席回数
岡本	奎六	8	0
倉沢	栄吉	4	4
阪本	敬彦	8	0
滑川	道夫	6	2
福沢	周亮	4	4
増田	信一	6	2
渕	吉正	4	4
室伏	武	0	8
望月	久貴	6	2

〔会員名簿の変更〕

ここには「読書科学」第23巻第4号に掲載した会員名簿の変更の後に届け出のあった異動を掲載する。

新入会

日本読書学会会則 (1979年8月改正)

第1章 名称と事務所

第1条 本会は日本読書学会と称する。

第2条 本会の事務局は当分の間財団法人野間教育研究所内に置く。

第2章 目的と事業

第3条 本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2. 会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3. 会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4. 読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
5. 内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6. 会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7. 会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第3章 組織と運営

第5条 本会の会員は正会員、名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの、または本会の事業に財政的援助をしたもので、理事会が推薦したものとする。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して、賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り、または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第6条 会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ、また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第7条 本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1. 会長 1名
2. 副会長 1名
3. 常任理事 若干名

4. 理事 若干名

5. 監事 2名

第8条 理事及び監事は、正会員が互選する。

第9条 理事は理事会を構成し、本会の事業執行の責任を負う。

第10条 副理事長は理事の互選により選出し、理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

第11条 常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは、前項の互選によるもののほか、理事の内2名に限り指名して、理事会の承認を経て、常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長、副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ、本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条 監事は、本会の会計を監査する。

第13条 役員の任期は2年とし、原則として互選の年の4月1日から翌々年の3月31日までとする。

第14条 本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条 本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

1. 事務局長 1名

2. 書記 若干名

事務局職員に関する規定は別に定める。

第16条 本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第4章 会計

第17条 本会の経費は会費、賛助会費、寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条 会費は当分の間年額4,500円とし、毎月3月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条 本会の会計年度は毎年4月1日より始まり翌年3月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第5章 雜則

第20条 本会の会則の改正は総会において審議決定される。

「読書科学」編集規程

1. 本誌は、日本読書学会の機関誌であって、1年1巻とし、原則として4号に分けて発行する。
2. 本誌は、原則として本会の会員の読書科学に関する論文の発表にあてる。
3. 本誌は、原著論文、実践報告、シンポジウム、展望、資料、文献紹介、学会情報、会務報告などの欄を設ける。
4. 原稿は、未だ他に公刊されないものに限る。
5. 原稿は、編集委員会の選考を経て掲載する。また、原稿に添削を加えることがある。ただし、大きな変更は、執筆者と相談する。
6. 印刷の体裁は、編集委員会に一任する。
7. 図・表など、特に費用を要するものは、執筆者の負担とする。
8. 原稿執筆者には、掲載誌10部を贈呈する。
9. 本誌に掲載された論文は、無断で複製あるいは転載することを禁ずる。
10. 本誌の編集事務についての通信は、日本読書学会編集委員会（〒112 東京都文京区音羽2-12-21野間教育研究所内）で受けつける。

「読書科学」執筆要項

1. 論文の長さは、原則として400字詰原稿用紙30枚までとする。
2. 原稿は、横書きとし、提出後訂正を要しないように字句内容を明確にすること。
3. 叙述は、科学論文にふさわしく、簡潔にし、図・表など最少限にとどめ、本文と図・表の無意味な重複をさけること。
4. 図は、そのまま製版できるように、半透明の用紙に黒インクで書くこと。
5. 主要な用語、外国人名、地名などの固有名詞は、原語を初出のときだけに付けること。
6. 数字は、算用数字を用いること。
7. 原稿には、要約を200字以内に付すること。
8. 引用文献は、論文の最後に、アルファベット順に一括して付すること。
- 文献の記述形式は、次のようにすること。
 - a 単行書
著者 書名 出版社 出版年 ページの指示
 - b 編さん書中の論文
著者 論題名 (著(編)者 書名 出版社 出版年 ページの指示)
 - c 雜誌記事
著者 論題名 誌名 卷号 ページの指示 年月日 (注、外国雑誌名は、イタリックの指示をすること)
9. 論題、所属、氏名の英文を付すること。
10. 原著論文については、英文の要約を付すること。要約の長さは原則として600語以内とするが、編集委員会が必要と認めた時はこれを越えて差しつかえない。
英文の要約は、次のようにする。
 - a 白紙に、1行おきにタイプする。
 - b 必ず邦訳を添えること。
 - c 英文に熟達した人の校閲を経ていること。
11. 原稿は日本読書学会編集委員会（〒112 東京都文京区音羽2-12-21野間教育研究所内）あてに送付すること。

IRA(国際読書学会)入会のおすすめ

International Reading Association は 1955 年に設立された国際的な読書科学研究の機関で、日本読書学会もこれに加盟しています。日本読書学会の会員で IRA にも入会を希望される方は、下記の要領で入会のあっせんをいたします。

記

1. あっせんを受けるのは日本読書学会の会員に限ります。
2. IRA の会員には次の 3 種の雑誌が配付されます。希望の雑誌名を申し出て下さい。
 - (a) The Reading Teacher (小学校の読書教育を中心としたもの)
 - (b) The Journal of Reading (中学校以上成人までの読書を中心としたもの)
 - (c) Reading Research Quarterly (読書科学研究の専門誌)
3. アメリカ、カナダ以外の IRA 会員には International Newsletter が無料配布されます。
4. 会費は年額次の通りです（海外会員割引額）

雑誌 1 種類の配付を希望する者	\$ 12.50
雑誌 2 種類の配付を希望する者	\$ 17.50
雑誌 3 種類の配付を希望する者	\$ 22.50
雑誌 3 種類プラス年度内の全刊行物を希望する者	\$ 37.50

5. 新入会希望者は会費相当額の円貨と、銀行手数料、書留送料を加算した金額を現金書留でお送り下さい。金額は為替相場によって変動しますので、その都度お問い合わせ下さい。

問い合わせ・送金先

〒112 東京都文京区音羽 2-12-21 野間教育研究所 阪本 敬彦

6. 雑誌は IRA から直接送られますので、住所氏名には必ずふりがなをつけて下さい。
7. 継続の方は、IRA から Renewal Notice が届いたらすぐに御送金下さい。その際 Renewal Notice を必ず同封して下さい。
8. IRA から会員証を受けとられましたら、会員番号を阪本宛に御通知下さい。
9. この件についてのお問合わせは、野間教育研究所 阪本敬彦 03-945-1111 内線 843 にお願いします。

Eighth World Congress on Reading

"The 1980s: Problems and Promises"

Sponsored by the International Reading Association

August 5-7, 1980

Philippine Plaza Hotel, Manila

Prominent educators from over 30 countries are expected to attend this biennial Congress sponsored by the International Reading Association. Approximately 100 meetings, featuring speakers from all over the world, will provide opportunities for professional growth and development.

Researchers, classroom teachers, reading specialists, college and university professors, librarians and others involved in the teaching of reading, teacher training, literature and literacy programs can expect to gain from the wide variety of topics offered on the program. (More detailed information indicating meeting topics and participants is available in the preliminary program.)

To supplement the professional aspects of the program, a number of social and cultural activities have been planned.

For travel information, contact Philippine Airlines, the official carrier for the World Congress. The toll free phone numbers for Philippine Airlines are (800) 227-4600 in San Francisco and (800) 424-9874 in Washington, D.C.

HUMANISM AND THE BASICS

THE READING INSTRUCTION JOURNAL, a publication of the New Jersey Reading Association, State Council of IRA and affiliate to NJEA is publishing a special thematic issue (Spring/Summer, 1980) -- "Humanism and the Basics" -- to dispel the current view that reading teachers must abandon humanistic teaching approaches in favor of the implied "mechanistic" three r's approach. Several nationally known authorities address this controversial problem in a variety of provocative articles. Authors included in this special issue are:

Roma Gans Dorothy S. Strickland

Dwayne Huebner Bernard S. Shore

Leland B. Jacobs M. Jerry Weiss

Frank Jennings Edited by John E. Cowen

"Humanism and the Basics" will be available to IRA members at US\$3.00 and to others at US\$5.00 from, Dr. John E. Cowen, Editor-in-Chief, THE READING INSTRUCTION JOURNAL, 1081 Trafalgar Street, Teaneck, New Jersey 07666, U. S. A.

Vol. 24, No. 2

July, 1980

THE SCIENCE OF READING

Published by The Japan Reading Association

President: Michio Namekawa

President-elect: Eikichi Kurasawa

EDITORS

Takeshi Izumoji

Sunao Ohara

Takahiko Sakamoto

Kazuko Takagi

Junichi Tajika

Junya Noji

Shusuke Fukuzawa

Shinichi Masuda

John Downing

Donald Leton

CONTENTS

Original Articles

Reading behavior and reading skills for coping with the changes in our society	OHARA, Sunao.....	33
The effects of writing book reports on the comprehension of scientific reading materials.....	SHIKANAI, Nobuyoshi.....	45
Relationship between reading material and comprehension (2) : A comprehension analysis.....	IKEDA, Shinichi.....	56
Introspective reports of reasons for hesitations during cognitive speaking.....	TANAKA, Satoshi.....	63
Official Notes		69

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined-number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Noma-ken, 2-12-21 Otowa, Bunkyo, Tokyo, Japan.

第24卷 第2号

会員頒布

〈通巻 第92号〉

昭和55年7月1日 発行

編 集 日本読書学会編集委員会

発 行 人 阪 本 一 郎

発 行 所 日 本 読 書 学 会

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

野間教育研究所内

振替東京6-3213番